31-325

# 金石錄

明治
40 5 8
內交

# 例言

一、本書は病閒錄以後に於ける著者が宗教上の感想を輯錄したるもの、病閒錄第二編とも見るべきもの也。

一、本書の文字、往々主張に過ぎ、誇耀に流れたるふしありて、或は讀者に蹉きを與ふるが如きことなからむかを虞る。筆意俱に未熟なるは、予のいたく慙づる所なり。讀者若し、詞章のために著者の眞意を害ふことなくば、至幸也。

一、著者刻下の信仰内容は、その微細なる點に於いて、書中記する所と、全くは一致しがたき節なきにあらず。これまた讀者の諒とせられんことを乞ふ。

一、本書卷頭に著者の小影を挿入したるは、世の一部未見の友の切望に應じたるに外ならず。なほ同影は、特に横濱なる敎友、中村金藏氏の秀技に成りたるもの、こゝに記して氏の厚意を謝す。

一、本書の校正は、すべて友人望月世敎氏を煩はしたり。謹んで感謝す。





一、本書中の文章の轉載に關して、『新人』『中央公論』、『早稲田文學』、『六合雜誌』、其の他二三の雜誌新聞當事者の與へられたる厚意の許諾は、予の感謝する所也。

明治四十年四月九日

著者識

# 同光錄目次

○予は見神の實驗によりて何を學びたる乎……一
○尺牘一則……二一
○二聲錄……三二
（一夜の瞑想）……三二
○神子の自覺……四四
○如是我證……六〇
○自覺小記……八五
○斷光錄……一〇〇
○眞理と人格の趣味……一三六
○純他力觀についての復書……一四五

○法悦のこゝろを想ふ……一五二
○信仰詩につきて……一六八
○神祕と宗教……一七三
○神仰問題に關する復書……一八一
○書牘……二〇一
○枕頭の記……二〇六
○一燈錄……二三四
○將來の宗教豫想に關して某氏に答ふる書……二五七
○求道の友に答ふ……二六〇
○偉大なる凡人主義……二七二
○病友に與ふる書……三一二
○聞光錄(其一)……三二六
○聞光錄(其二)……三五一
○信仰生活の一風光……三六九
○金子筑水君の「宗教的眞理」を讀む……三七五
○再び宗教的眞理に關する筑水君の辯論を讀む……四〇六
○見神の意義及び方法……四三三
○讀列子……四七八
(子列子の解脫哲學)……四七八
○讀墨子……五三六
(墨子の神意的功利說)……五三六

# 回光錄目次終

# 回光錄

綱島梁川

## 予は見神の實驗によりて何を學びたる乎

拙著『病閒錄』に於いて、予が「見神の實驗」を語りたるは、讀者諸君の記憶せらるゝ所なるべし。予はこの見神の實驗によりて何を得たる乎、何を學びたる乎、何を悟りたる乎。

見神の實驗その事、既に末代下根の我等に取りて、絶大の

恩寵也、所得也、光榮也、感謝也、平安也、解脫也、法悅也。而かも眞理は孤ならず。一の眞理は他の多くの眞理を暗藏す。眞理の光は黙然として永し、その光に觸るゝものは、一二の貧しき概念もて括る能はざる許多の事相を想ひ出づるなり。眞理はその至れるものほど、即ち其の具象兼普遍の性を著すること多きものほど、多くの暗示力を有す。是くの如き眞理はそのいと微さきものだに、尙ほ草頭の一露の、湛然として萬有を涵し育む潤澤を有すべし。今夫れ神は眞理の最大なるもの也。神を恐るゝは智慧の始にして終也、されば、われ神を見たりと稱して、若しその富贍なる眞理の萬一をも髣髴せしむる能はずんば、是れ畢竟神の空名を攫みたるに過ぎず、惡魔も尙ほ是くの如き神を有し、僞善者も尙ほ是くの如き神を語る。されば、われ何をか語るべき。

げにや、予れ一たび大慈の御手に導かれて、眞理の萬水、滾々と流れいづる實在の太源に立てり き。何等の光耀、何等の祝福。而かもわが有限の眼は、是くの如き眞理の萬水の遙かなる行くへの末を測ると能はず。予は予の見神の實驗が、わが身世に齎らすべき將來の光景如何については、その十一をだに語ること能はず、否此くの如きは我等分內の事にあらざる也。能ふべくば予は唯だ見神の光耀の刹那の意識を分析的に回顧して、そこに見證したる一味の新光景を語らんか。見神の意識の如實の相は、所詮不可說なりとせんも、其の刹那の意識に於ける富贍なる內容の一分をなすものとしての或種の眞理を語るは、必ずしも不可能の事

にあらず。そは見神の意識に當然含まるべき若しくは其の內在必至の結論たるべき眞理也。かゝる眞理を語ることに於いて、予は予が見神の實驗その事を一層確實のものとするを得べきにあらずや。一の眞理は能く他の眞理を觸發し、而してかく觸發することに於いて、一の眞理そのものが一層その確實性を增し來たるなり。

之れを語るの前に、今一つ讀者の注意を乞はむとするは、謂ふ所の見神の實驗が、決して全く因果の理法と違背せる超絕的不可思議の出來事にあらずといふ一事なり、勿論、神の現前は、一面吾人の自力沙汰を以て力索强求すべからざる驚絕駭絕の神祕天來の恩寵なりといへども、而かもかゝる恩寵を恩寵として納受感得する相應の準備、心構への先づわれに存するなくば、これはた詮もなき事なり。神は猶ほ地中の水の如く、洋々として當處に充ち盈てり、唯だ世に眞實無妄の心を以て之れを鑿り當つるものの鮮なきを病ふるのみ。一尺を穿つものは一尺實在に觸れたる也、一丈を穿つものは一丈實在に觸れたる也。かくして穿ち穿ちて休まずんば、豁然として眞理源頭の活水に汲むの大歡喜に參與すべし。眞理みづからには發達なしといへども、その吾人の意識に現はるゝや、嚴に發達の理法を履む。悟れば卽ち佛なりといふ、然れども悟るその事に段階あり、發達ありと知らずや。眞理は奇蹟にあらず、神は一躍を容るさず。唯だ一息不斷に向上の功夫を積み積みて、機緣おのづから純熟するに至りぬれば、こゝに始めて一期の光耀事あ

り。そは過去一切の經驗の結果也、頂點也、Culmination 也。

予の見神の實驗また實に是くの如きのみ。『宗教進化論』の著者、ケイアドは曰ふ、

"The Development of man is one continuous process, by which he is brought to a consciousness of the world, of himself, and of God, and *every step in that process is equally essential to the ultimate result.*"

と。吾人の宗教的意識は發達の理法を離れたる奇蹟にあらず、過去一切の經驗は、悟に達する一段階として、皆不可拔の意義あり、價値あり。されば吾等をして向上の功夫を舍てて神を見るの恩寵を語ること勿らしめよ。吾等神に近づかずば、神は吾等に近づきたまはざる也。

予は見神の實驗に於いて、先づ天人父子の關係を實證することを得たり。基督が其の絶倫の天才を以て、如意に直覺し、自在に游泳したる天人父子の意識は、秋毫も詩的表現を以て見るべからざる最眞實、最嚴肅なる客觀的眞理なることを自證することを得たり、否この意識は、かゝる人的比論の言葉をもて寫し出づる以上に、更に豐富にして深邃なる內容を有す。少なくとも予みづからは實驗の刹那まか感じたる也、唯だ外にこの無類の意識を表する適當の言葉を見出だざりければ、乃ち最も適當の表現に近しと信ずる件の父子てふ語を藉り用ひたるのみ。げに基督は、いしくも萬古不易の詮表形式を擇びつるかな。予も亦唯だ基督の言葉を襲ぎて見神の意識に含まれたる天人の關係を表現するの外なき也。されど、嗚呼深いかな見神の意識(予は今尙

ほ當時を回憶して無限の驚喜に打たるゝなり)。その刹那、予自身は全く神の中に融け込みたる如くに感じたり、筆を動かして物書くものは、今までの予にあらずして、天地の深底より堂々と躍り出でたる神自身なりけるなり。(この驚絶の意識は、予の客觀的要求と合したる最眞實の意識也、予は今尙ほ明瞭にこの意識を再現し得るなり)。見よ、この刹那、唯だ大いなる靈的活物の、予の全意識を領ずるありて、予みづからは復た在らず。予はこの大いなる靈的活物の中に還沒せり、予卽神となれり。されば予の個人格としての存在は、この時全く神の實在に泡沫と消え失せたりと謂はん乎、而かもかく謂はんは是れ未だ精確に如實に予の其の折の意識狀態を寫したるものにあらず、何となれば、予は一面に於いて全く神の大實在に還沒し解體したるの感を有したると共に、他面に於いては、不思議にも又予は、意識のいづこかの一隅に在りて、一種驚喜と敬畏との念を以て目のあたりに件の神の現前を睹たるの感を有すれば也。神は現前せり、予は神に沒入せり、而かも予は尙ほ予としての個人格を失はずして在り。驚くべきかな、この融會相卽の一境、父子有親もしくはSonshipの言葉を以て寫さんには、この一境餘りに深く、餘りに切に、又餘りに透徹也。かゝる形容辭は唯だ能く其の萬一の相を髣髴するに足るのみ。而かもこの一種の辭を藉り用ふるの外に、この靈交相卽の境を寫し出づべき言葉、復た人の世にはあらざる也。

『新人』第六卷第九號に於て、中島氏が其の見神の經驗

を語られたる中に「神の内に我れが溶解こんだやうな感じがして神と自分との間が明瞭でなくなつた、寧ろ差別が無くなつたとてもいふ方が良からうかけれど差別なき所に差別がある、其の喜びのうちに敬虔といふ樣な一種の感も強くあつた」とありし一節は、予の意識經驗と相類似したるもの、如何にもかゝる刹那に於ける精微なる意識狀態をよく寫し出でられたりといふべし、予は予の實驗によりて中島氏の實驗の眞實を證し、而して同時に又予の實驗そのものの眞實を一層確かめたるの感あり。

是くの如くにして予は「我れは神の子也」てふ自ら欺かざる不壞金剛の自覺を握り得たり。基督の絕倫なる人格と事業との祕訣は實に繫りてこの一自覺に存したるにあらずや。感謝せよ、劣機下根の予にして、今又彼れと同じ自覺(其の内容の深淺は措き)の祕鑰を握り得たるは、何等の神恩ぞ。嗚呼我等は神の子也。神を模範として活き、神の經綸を亮けて勵みいそしまざるべからず。かくてわが世の一日は光榮の一日也。われはこゝに人生最崇高の意義を發見し、解脫と新生とを併せたる大悅を得たり。

次ぎに予は見神の實驗によりて神の精神的人格性 Spiritual Personalityを自證することを得たり。神は人格なりや否やの問題が、純然たる理論的、客觀的研究に因りて到底釋き得べき性質のものならざるは、何人も想著すべき點ならんが、予は見神の實驗に參じて、今や渙然としてこの一問を

釋盡するを得たるの思ひあり。夫れ神は宏大無邊、唯だその實有てふ以外、到底人知の把握を超越す。佛者の所謂非思量底の一語、以て神の不可知的實相を盡くすべし。嗚呼神豈竟に知り得べきものならんや。無邊の風月、不盡の乾坤、われらは唯だ顧みて人智の小を歎ずるのみ。但だ予輩の實驗上、こゝに一事の確實として許さざるを得ざるものあり。何ぞや。是くの如き超越不可知の神が、吾人の精神的人格を通じて吾人に顯現すといふ一事是れ也。神の來格するや、吾人の精神的人格に於いてす、是に於いてか精神的人格は單り吾人主觀の有たらずして、又神の客觀の有たることを知る。精的神人格たらざる、少くとも精神的人格の一面を有せざる神が、吾人の精神的人格に顯現來格すべ

欠

MISSING

のみ。我が所謂永生の自覺を有するものは、時間の制約を超越して、常に「大いなる現在」に生活す。達者に生なく死なしとぞいふ。彼れが一念の充實は、能く三世の因果を踏斷す。今日是くの如くに生き、明日是くの如くに生き、千萬年亦復た是の如くに生く、何が故ぞ、是れ神に在りて生くればなり。夫れ神に在りて生くる者は、常住に生くる者也、眞個に生くる者也、彼れは莊周の所謂「無遯の常存」に游ぶ者乎。こゝには復た生死流轉の時劫の累を受けず、いづくんぞ未來生に憬るゝがごとき一念の迷執を著けんや。吾等若し寔に神に在りて生くるの自覺無からんか、所謂死後の未來生活を千億萬年續くるとも、是れ尙ほ依然として神なきなり、依然として永生なきなり、依然として悟達なきなり、依然と

して生死無明の迷ひに流轉せざるを得ざるなり。かくても尚ほ吾人は未來生活を追躡して息まざらんとする乎、そも〳〵是くの如き生活、吾人の眞生活と何の交渉かある。神に生きずして時に生きんとするものは禍なるかな、是れ豈眞個の永生ならんや。吾人をして是くの如き神なく光明なき淺ましき無意義の未來生活を呪詛せしめよ、吾人をして是くの如き恐ろしき長夜生死の夢より覺醒せしめよ。古聖も「朝たに道を聽けば夕べに死すとも可也」といへり。道是れ眞の生命にあらずや。吾人をして道なく、光なく、神なき不朽生活を愧ぢしめよ。大いなる光を觀ば又小なる光を要せじ。眞に一たび神に生きて永生の鍵を握れるものの、復た曷すれぞ拘々として未來生活に一念の迷ひを繫がんとはする。眞の永生なき未來生活、吾人に取りて竟に何の要ぞ。神に生くるものは是れ未來生活以上の無價の摩尼珠を有するものにあらずや。達者是くの如くに敎へ、吾人も亦こゝに宗敎の眞諦を見出ださんとす。但だ吾人の性の脆弱なる、さば〳〵生死流轉の波に蕩かされて、神なき寂びしさに泣かざるを得ざるとあれど、さかも一たび得たる自覺は永しへに失せじ、刹那を神に生くる者は是れ永劫を神に生くる者にあらずや。かくて我等、役々たる世途の塵に埋もれはつる折にも、尚ほわが深き自覺に刻まれたる本地の風光に心躍りて、感恩の涙油然として下るなり。我等は絶えまなくこの世の生死時劫の波に搖られつゝ脊かされつゝある間にも、尚ほ常に悠々として「大いなる現在」て

ふ不死の一境にあるの感を有するを得るにあらずや。而して予が見神の實驗によりて、この「大いなる現在」を最もさやかに具象にし得たるは、何等の祝福ぞ。

所謂來世有無の問題は、人心の要求として永しへに繰り返さるべし、而かもそが到底一個の閑是非にして、吾人が宗教的生活の眞諦と何のかゝはり無きこと、是れ予が見神の實驗によりて益〻明かに證し得たる所也。「永生」てふ自覺の中には、過去も未來も參涯きて唯だ一個常樂の「今」あるのみ。之れを達人常住の家となす。

中島氏また見神の刹那を描きて、死生といひ未來生活といふ如き問題を考ふるの必要全く無くなりて、唯だ唯だ「たのしい」といふ一念を以てのみ充たさるゝに至れりと言はれたる、是れ卽ち謂ふ所の「大いなる現在」の自覺にあらずや。思ふに吾人が死を怖れ、未來の生活を慕ふが如きは、畢竟是れ未だ神に在りて常に生くるの眞自覺なく、隨つて一念に或空虛を藏するが故のみ、神に生くる自覺の常に活潑なる所、法悅、內に充實して、また一念の空虛を著くるの餘地なかるべし。既に空虛なし、故に又生死なく、未來なし。こゝには唯だ「有りがたい」、「忝ない」、「嬉しい」、「樂しい」といふ如き一念の「大いなる現在」あるのみ。「大いなる現在」に生くるものは、喜び常に衷に足らへり、また外慕の遑あらざるなり。彼れが敬虔魂は、過去を顧み未來を慕ふを以て寧ろ不敬事と思惟する也。嗚呼悠々たるかな、如是達人常住

の接遲、而してこれ我等の到り得べき境地なるが故に、神恩常に我等に餘れり。

予が見神の實驗より得たる證果、必ずしも以上に盡きたりと言はず。唯だ今は煩を避けて、その主要なる二三を擧ぐるに止めたり。讀者之れを諒せよ。

（明治三十八年十一月）

# 尺牘一則

先日は小生が曾て『新人』慰問號に掲載いたせし「安心立命の二法門」と題する一論文に對する雜誌『宗教界』の批評切抜御送り下され難有存候。右批評に關して何か意見あらばとの御尋ねに候ひしが、別に意見と申すほどのものも無之、唯だ想ひうかべしまゝの一つ二つを左に申述ぶべく候。

小生は彼の論文に於いて「あきらめ門」の信仰のみが凡神論の唯一必然の結論なりとは申さず、かく申したるやうに解られ候ひしは不文の罪にて、眞意は決してさにあらず、小生は唯だ歴史的事實上「あきらめ門」の信仰を持するものが

凡神教者に多かりしてふ大體上の傾向の觀察に基づきて、かくは大らかに立論せしにて候。印度婆羅門哲學者や、スピノーザや、ストア派や、列子や、皆さにて候はざりし乎。彼等の多くは詮かたなさに諦めて安心する一種の絶望的宿命論者なりしにあらずや(スピノーザやストア哲學者の一部には、まゝ歸依信樂の調べ高き一ふしも有之候へど)。彼等は概ね白眼もて一切を觀じたる無頓著論者にて候ひし也。要するに凡神論と「あきらめ門」の信仰とは仲よき同行者也、彼等は同じ血を分けたる同胞(はらから)にはあらざる乎、小生は二者の間には、少くとも其の一面に於いて、必至の論理的關係あるを信ぜんとするものに候。されどこの事、尚ほ他日の詳論を期(ご)し候べし。

『宗教界』記者が天台、華嚴の教理を提げ來たりて、その人生觀の消極的、空諦的ならざるを言ふや甚だよし、十界互具といひ、一念三千といひ、理事無礙といひ、事々無礙といふ如き一種深奥なる眞理が、吾人をして「萬法皆善」もしは "What-ever is, is right." もしは「萬物靜觀皆自得」といふやうなる樂天的達觀の法眼を開かしむるものあるは、頗る多とすべき點に候べし。「あきらめ門」の消極的安心を以て凡神教の唯一の結論と信ぜざる(併し凡神教の少くとも一面には前言の如く、たしかに消極的宿命觀と必然の關係の存すること何人も得否まざる所なるべく候)小生に取りては凡神教にこの積極的、樂天的達觀の他の一面あるとを信ずるに少しも碍げはあらず候。寧ろ小生はこの消極的安心と積極的悟

達との表裏二面を有するが凡神教の奇異なる而かも正當なる一特質にはあらざる乎と存居候者に候(かの論文には大體上の史的傾向より見て凡神教の一面の結論をのみ陳べたるにて候)。この二個の矛盾意識を合はせ攝めたるものは、例へば羅馬ストア學の勇將マルクス、アウレリウス帝の上などに見るべし。一面には因果必至の自然界の大法に對する白眼の宿命觀と、他面には一切萬有を理性、神性の調和的實現と觀ずる悠々たる樂天觀と、この二極端の矛盾意識の一種無類の總攝は、彼れに於いて明らかに看取すべく、而してこれ不思議に似て必ずしも不思議ならず、寧ろ一面には無限に人を押し上ぼせて我卽神の意識に思ひ上がらしめ、他面には無限に人を引き下だして我卽蟲(同じ世界に湧いた蟲)の意識に思ひくづをれしむる凡神教本來の教相其者の然らしむる必然の結論には候はずや。

但だ、天台、華嚴の甚深の妙理も、吾人に一種の哲學的達觀(むしろ後にいふ如く美的達觀)を與ふるに止まりて、そは未だ歸依信樂の涙を打灑ぐべき對象たる神又は佛陀を吾人に與へざる也(アウレリウス帝の神もこの要求を充たすには餘りに貧相に候)。然らば淨土眞宗、日蓮の諸宗は如何にと言はむ乎、これらの諸宗が小生の所謂「信賴門」に屬すべき者なる事、必ずしも『宗教界』記者の指摘を須つて後に知らず、唯だ小生はこの「信賴門」の勇者の最大の代表者として基督を擧げたるにて候。法然や親鸞は信賴宗の偉大なる勇者に候べし。彼等は小生の日ごろ渴慕措かざる先覺に候。

及ばずながら小生も居常彼等が南無阿彌陀佛と唱ふる其の深き敬虔の涙のこゝろを味ひ辿らんとするものに有之候。あはれ、世にも南無阿彌陀佛といふ寥々たる六字の名號ばかり、歸依信樂の美はしき宗教的消息を潤ひの光りめでたく圓かに詮表し得たる言葉またと候べしや。まことや彼等は出離解脱の偉なる勇者にて候べし、さはれ彼等の出離觀、解脱觀なるものが、彼の歐洲中世紀の基督教徒の如くに、餘りに二元的、主樂的なりし點は爭はれまじくや。彌陀の願力を信じて極樂往生を遂ぐるが幾んど彼等唯一の忻求にては候はざりし乎、現世は彼等にありては、寧ろ處定めぬ遍參僧の、假りの一夜の宿りとも觀ぜられざりし乎、少なくとも彼等は押しなべて、西方淨土の來世に重きを措きて、現實の社會人事を第二義的に見、若しくは之れに餘り多くの興味を有せざりしが如し。所謂西方淨土は一念上の事にして、彌陀亦「唯心」の彌陀に外ならずして、之れを客觀的に實在するが如く觀るは畢竟劣機に應ずる擬人的第二義の說明のみと言ふものあらん乎(是く說くが果たして他力淨土門の信仰消息を如實に言ひ表はしたものなるか否かは一疑問に候べし)、今は暫くこの論點を爭はずとするも、いづれにもせよ、此の一宗門が現世に重大の意義を措かざるは爭はれまじき事實にはあらざる乎。所詮出離若しくは解脱の一面(これ固より人心不拔の要求也、忻求也)を重視するに偏して、出離若しくは解脱の三昧火中より鍛へ出だしたる新人てふ自覺及びその宇宙人生に占むべき位地に關

する活潑なる新自覺について、明かに教示する所なきは、この宗門通有の宗教的意識の一弊ならざる乎。彼等に新人もしは新人格の自覺ありや、この新人の宇宙人生に占むべき位地の新自覺ありや、乃至彼等が人生に對する窮極の理想は何ぞ、凡そ此等至重の問題について、大いなる光明を彼等の宗教的意識より得る所尠なきは、小生のやゝ遺憾とする所に候也(少なくとも小生今日の分に於いて)。彼等が解脫三昧、出離三昧は重んずべし、されど極樂往生といふ主樂的一面、其の唯心の主觀的淨土觀たると、紫雲たなびく西方の客觀的淨土觀たるとに論なく)のみにて果たして吾人の宗教的要求は全く滿足せらるべき乎。この出離解脫の意識と共に、一面神(佛陀又は如來といはんも可)と共に働くの意識、その天地人生の經綸に參るの意識、神の理想をこの下土現實に施きて、所謂「天國」をこの土に建つるの努力意識、即ち儒教にていはば「天功を亮くる」の意識、基督教にいはば「我が父は今に至るまで働きたまふ、我れも亦働く也」てふ意識、この一面の意識ありて、始めて我等が全き宗教的要求を語り盡くすを得るにはあらざる乎、　或はこの現實的活動の積極的意識は、大乘佛教の通有性にして、天台、華嚴の如き、最も深邃豐富にこの消息を發揮せりと謂ふものあらんか、小生また必ずしもこの言の事實なるを否むものにあらず候、さりながら「一色一香中道にあらざるはなし」てふ差別即平等觀も、「一即一切、一切即一」の融會自在なる理事、事々無礙觀も、要するに此等一類の眞理は、寧ろ吾人をして天地人生

に對して「在るものはすべて善し」てふ一種美的靜觀の態度を抱かしむるに適はしくして神意天功を亮けて歩々理想を現實に充たしゆく努力精進進歩向上の意識を抱かしむるには適はしからずとやうに存ぜられ候が如何にや。

少なくとも佛敎は其の根本の理論的組織に於いて、右いふ意味の理想に對する不滿足より生ずる進化もしくは發展の消息を傳ふるに著るく闕如せる所はなき乎。吾人は天台華嚴の甚深の妙理に娑婆即寂光淨土の美的靜觀の消息を學ぶべく、また淨土眞宗の他力信樂の意識に出離解脫の三昧を會すべし、唯だ新たに得たる自家人格の意識に立ちて神と俱に働き無窮に天功を亮けつゝ、所謂「世界之進行」に一歩の力を藉すといふが如きこの一味の向上的進化的意識に至りては、惜しむべし、てゝには寂寞たるの觀有之候。若し大乘佛敎發展の極意なるものが、(或佛敎學者の說く如く)歩々向下して、差別界萬殊の事相に俯就泛應するにあり、而して淨土他力門が正さしく大乘の眞理の積極的向下の極に達したるもの、其の究竟至極の發展に到れるものとすれば、其の吾人に敎ふる宗敎的信仰の消息なるものが、吾人の極致とする宗敎的信仰と尙ほ一歩を隔て候所あるやにも存ぜられ候也。草々不宣。

（明治三十八年十月）

# 二聲録（一夜の瞑想）

今宵は月いと明かければ、病の床を椽端にうつさせつ、久しく負きたりし天上の友と心往くまて物語りせんとてなり。夏も半ばを過ぎて遠近の蟲の聲〻、秋のこゝろは早やわが月前の庭に通へり。庭の繁葉を見越して、彼方にやゝ低う芋畠の露のきらめき、それを距てて一むら竹あり、樹立あり、草葺家根あり、瓦家根あり、參差として皆夢の裡なる月下の景に入る。見よ、今し千〻の木草、皆一つ光に濡れて、醉ひて、あるかなきかの樣に漂ひぬ。仰げば明光、空と一つの心に融けあひて、おのづから吐く模糊の薄絹に、大地の卑く穢きをも包む姿の、あはれ、秋の月の己れ一人を高う澄み上ぼりたるとは殊なりて、その氣高さ、優さしさ。げにや、蟻のとわたりをも隈なく照らしぬべくて、尙ほ深き心の傷手に泣くこの世の罪の子らをも庇ふ慈けごゝろの今宵の月こそは、わが銷魂の戀にもあるかな。やがて、月と人と、形釋け心凝りて、見渡すかぎり渺々と、唯だ一味慈光の潮渦なして打ひろごりぬ。わが天眼の華開けて靈しき翼もてる天つ使や、世〻の貴き聖りだちの讃美の歌聲の、大空の光の波と搖らぎたゞよひて灰かに打聞かるゝ淨嚴の世界を見たり。おぼしを夢に辿る心地して、一念いつしか瞑想の境に入りぬ。

この境また月なく、我れなし。さはれ、まことの月を見るものは月に面はずして月を見、まことの我れを見るものは

我れに對はずして我れを見るとぞいふ。一砂一塵、清光の海に漂ひ、一草一木、觀念の懷に游ぐ。何物か是れ月ならざる、何物か是れ我れならざる。法月永しへに無邊世界の砂を照らし、法我限りなく不盡乾坤の波を揚ぐ。何等淨嚴の一境ぞ。

曾てきば〳〵涅槃實相の一義に惑ひにき。その寂然たる大死の涯なし海を望んでは、幾たびか悸き畏れたりし。されど曾てまことの涅槃を見ざるものは、誰れか涅槃の眞相を說き得んや。されば許せ、我れをして且らく今宵の月のこゝろを材として、わが主觀景裡の涅槃の一義を說かんとするを。げにや、涅槃は死也、消極也、否定也、虛無也、寂靜也、拂拭也、無色也、無相也、無聲也、無臭也。さはれ、これら一切の消極の底より、法音おのづからさやかに强く浮かび出づるは、己が姿の萬有を寂かに打眺めて、一切不捨の大悅に入れる涅槃淨樂の景にはあらざる乎。差別の萬法を一味の光に抱き和げて、寂然として觀照する朧ろごゝろの今宵の月こそは、正さしく涅槃の眞姿にはあらざる乎。寂に死して照に生く。寂而照は、これ涅槃を兩端より盡くしたる實相にはあらざる乎。されば、わが所謂寂靜涅槃は卽て寂照涅槃也、而して寂照涅槃は卽て是れ觀美涅槃にあらずや。如是に觀じて、涅槃は最も强くわれらの要求と結び來たる。あゝ美はしいかな觀美涅槃の月。曾てわれ涅槃を知らずして涅槃を怖れ、今はわれ涅槃を見て涅槃を戀ふ、今宵の月と一つ慈の光に融け合ふを樂ふわれの心ぞ、やがて涅槃淨

樂の境に分け入るを樂ふ心なる。涅槃に月なし、法の月あり、涅槃に我れなし、法の我れあり。法我と法月と一つ心に寂然として萬法を觀照する美的淨樂はやがて涅槃本地の風光にあらざる乎。美くしきは、觀美涅槃の久遠の月の姿なるかな。客塵煩惱の涙をぬぐき我等衆生をして、毎にこの一景本地の月に憬れしめよ。あゝ我が心今切に死を願ふ、鹿の溪水を慕ふが如くに死を慕ふ。涅槃はわが故里なり。

やがて月雲に入りぬ、我れは美はしき瞑想より還りたり。意識惺々、見よ、こゝに我れ在り、こゝに現實の我れ立てり、こゝにわれ、白日の事實として立てり。我れは夢にあらず、幻にあらず、五蘊の影にあらず、因緣の鏈にあらず、あらず、我れは恆有自性の自覺なり。我れは我れなり、天地の間に鏗然として占むる自覺の單元なり　是くの如くに我れ天地の間にあり、而して天地の間、またこの我れ、ありてふ一自覺を傷くる何物もあらず。神もわれを空ずる能はず、佛も我れを抹する能はず、魔も我れを拂ふ能はず。浩然、凛然、湛然、居然、是くの如くにして我れ在り。而して是くの如き我れは三世十方を蔽ふ全法界に、復たと同じ二個なく反覆なき唯一特殊の限りなき貴き意義と價値とを有する自覺的實在にあらずや。さらばわれ何をか願ふ、曰はく唯だ我れたらんこと也。我れをして永しへに我れたらしめよ。我れは一個特殊の自覺として、どこまでも向上し、活動せんことを願ふ。われは夢みることを欲はず、醉ふことを欲はず、眠ることを欲はず、休むことを欲はず。あはれ涅槃とや、そは美

はしき痴人の夢なり、われは寂照涅槃の月に憬れてわが自覺を稀薄ならしめ、茫漠たらしむるとを欲はず。わが自覺をして常に中天の白光の如くに堅く、熾んに、勁く、燎かなる事實として燃えしめよ。わが酬酢の環境をして、花を隔つる春の水の朧ろごゝろを著けしめずして、雪を戴く秋の山の呼べば直ちに應ふるが如くならしめよ。わが環境をして觀美的ならしめずして道德的ならしめよ。無窮にこの道德的環境を支配しつゝ征服しつゝ、進ましめよ。「安息とや、吾等は安息の爲めの全永劫を有てるならずや」。否、われはかの「常精進菩薩」「不休息菩薩」の勇姿を蹤うて、唯だ〳〵無窮に働きつゝ、戰ひつゝ、永劫の天の階を攀ぢ躋らんことを願ふ。われは無窮に目ざめて、無窮に精進せんことを願ふ。これ實に吾等が至深の要求にあらずや。無窮の活動、是れ我れの我れたる本性也、實在也。されば我れをして戰はしめよ、克たしめよ、われは戰ひの子也、克捷の子也、戰ひと勝利と、これわが生命なり、我れにこの二つを與へよ、然らずんばわが生は落莫として永しへに枯れ果てなん。あゝ安息とや、觀美とや、寂照とや、死とや、涅槃とや。神よ、この一類の言語文字を永しへに宇宙以外に驅遣せよ、われは活動不息の權化なり。

我れは詐りならぬこの二個心奥の聲に耳傾けぬ。偉大なるかなこの聲。そは天地人生そのものの如くに深き聲なり。一の聲は寂照涅槃の月に眠らんことを願ひ、他の聲は煌々たる白光の日に目ざめんことを願ふ、一は萬法を靜

觀せんとし、他は萬有を征服せんとす。一は美的享樂を願ひ、他は道德的健鬪を願ふ。一は永劫の安息を望み、他は無窮の精進を望む。一はあはれ〳〵と打眺めんとし、他は一氣無閒斷に働きいそしまんとす。一は平等界の法、我たらんことを欲ひ、他は差別界の個、我たらんことを欲ふ。一は「在るものは一切善也」と觀じ、他は「すべて善なるものこそ在るべきなれ」と觀ず。一は充足圓現の天地に逍遙し、他は向上不滿の天を仰ぎて躋る。一は自覺を沒せんことを願ひ、他は自覺を立せんことを願ふ。嗚呼、この二我の要求は矛盾の聲なる乎。決して然らず、この壓すべからざる二つの聲あるの故をもて、我れ知る、吾等人の子はやがて神性に與る實在なることを。夫れ神は寂然としておのが姿の萬法を靜觀して不斷の大悅に優游せると共に、一面また常に天地の經綸に心を碎きて息むことなし。神は無限の充足にして、又無限の向上也。人この二個の神性を分有して、一面には法我として久遠の懷に萬法寂照の美的淨樂を享受し、他面には個我として天地人生の經綸を亮けて不斷に理想の實現に自彊す。神と共に樂み、神と共に働く。かくて吾等はまことに神之子なる。あゝ神之子。世にもこれほど、吾等人類が宇宙の閒に占むべき位地の自覺を敎ふる最深切、最崇高の言葉あるべしや。人まことにこの一自覺を有して、始めて天地の閒に生まれたるの大悅あり。されば世の偉いなる靈魂の要求は、竟にこの二大意識の調攝に達せずんば已まず。彼等はスピノーザの寂靜觀と、ライプ

ニッッの向上觀と、エマルソンの瞑想觀と、カーライルの勞働觀と、ラスキンの安息觀と、ブラウニングの健鬪觀と、而して又佛敎の觀美涅槃觀と、基督敎の生々發展觀と、實相一如之神と、差別進化之神と、この二大意識、二大信念を調じて立てるものなり。崇いかな如是の人。彼れは內に「大いなる現在」の海を湛へて、外に無窮の「時」の流れを溯る。彼れは悠々たり、又翼々たり。彼れは超然として達觀し、又惕然として勞謙す。かの靜中動を觀じ、動中靜を觀ずてふ古來一派の道學者流の功夫なるものも、亦おのづからこの一側の消息に觸れたるものある耶。非耶。

やがて雲破れて月出でたり。滿天の慈光は春の潮の華かとばかり、わが癯せたる膝、枯れたる顏に、さと打かゝりぬ。

多謝す、こよひ一夜の瞑想は、いとはかなきすさび草なりけれど、是れわが生の光也、柱也。さらばわが天上の友よ、また逢ふまでの懷ひでに、汝れが今宵の美はしき面影をわが世の戀といつき護らしめよ。さらばなり、天上の友。

（明治三十八年十一月）

# 神子の自覺

曩に小著『病閒錄』に於いて「予が見神の實驗」を說くや、道に篤き諸君子の大膽なる(この語を許せ)批評を辱うしたるもの二三にして止まらず。但だ予をして忌憚なく言はしむれば、概ねこれ局外の紛々のみ、而かも醋りて思ふ、理固より然るべきなりと。それ親しく見神の三昧に實參せる予みづからにして、之れを說き之れを傳へんとするに方たりては、尙ほ且つ日を盤となし燭となすが如き繆戾河漢の辭を累ぬるの外なかりしを、況してかの門外に立つて他が場裏紅紫の光景を揣摩品評せんとするものに於いてをや。其の說明のやゝ實を得たるに近しと思はるゝものだに、尙ほ且つ具象の肉を抽象の骨に削りなし、而して草々として人猿畢竟同彙のみと說き去るの類に過ぎざるをや。諸君子の批評果たして是乎。嗚呼眞理證明の事、決して容易にあらざる也。

予は必ずしも自家の見證三昧を將て他に强ひんとするものにあらず。眞理の海は浩渺として橫に際涯を絕つ。予をして自己の信念を敬すると共に他の信念を敬せしめよ。勝機劣機といひ、正信迷信といふ、詮じ來たれば同じ天上妙光の影向のみ。機に應じては魚頭また光を放つ。一切不捨は大慈大悲の本願にあらずや。予をして予の見たる所を予の方法にて宣べしめよ。かくて若し幾分眞理の暗示をだに他に傳ふるを得ば、予の使命や空しからず。見

證の事、所詮は機根上の事なり。予は予の信念を他に強ふるを厭ふ。信念界の黄茅白葦は慶ぶべき事にあらざる也。

予が見神の意識内容は、極めて明瞭にして又極めて神祕也。極めて明瞭なり、そは意識直接の自證なるが故に。極めて神祕なり、そは一切の思議言説の相を絶したるが故に意ふに輓近に於ける諸科學、殊に精神科學の發達は頗る驚くべきものあり、而かも其の一切の精鋭を集め來たつて、之れをして見神の自覺の一孤壘に薄らしむとも、尚ほ能く如何ほどの效果をか收め得べき。三千年來築きあげられたる科學哲學の大寶藏は、げにわれ等人類の誇るべき偉大なる建物なるべし(予はかの頑然として強ひて學問の勢力に盲ならんとする宗教家に與みせず)。さはれ、今之れを取つて予が見神の意識に比す、此れの限りなき深祕久遠の大潮音の心耳に轟轟たるものあるに對して、彼れや、さながら實在の淺瀬に騒ぐ小波の聲とも聽き做されざる乎。或は予が見神の自覺内容を説きて自我の超越といふ乎、恍惚といふ乎、はた自我の擴大若しは光耀といふ乎、他をして任意の言語文字を拈出し來たらしめよ。如是一類の説明三昧、究竟何の爲す所ぞや。予は今尚ほ(この筆を運べる間にも)當時の大光景を靜かに且つ明かに回想し得て、唯だ心跳し、唯だ歎美し、唯だ驚喜し、唯だ感謝す。謂はゞ天地の奥底より火よりも燎かに予を通して眼前の事實と動き來たれる大いなる靈的活物の稀有妙法の相は、何を以てか其の萬一を髣髴せしむべき。唯だ神と予みづからと、二個の自覺者を

措きては、兩閒茫々、復たその刹那無類の光景を知る者あらざる也。理性の權能を謂はん乎。然り、予は理性の權能を敬するを知る。予は曾て(少なくとも意識して)理性の要求を壓したるとあらず。理性の要求を壅塞して纔に立つが如き信念は、堅實なる信念と謂ふべからず。信念は正さに全人上の事なるべき也。眞個の信念は自家人格の分裂を賭して贏ち得べきものならず。爾の全機根を提げ、爾の全要求を打ち出だし、かくして爾の信念を得よ。誠ある所、則ち活潑なる感應あり。吾人の信念是くの如くにして始めて光輝あり、充實あり。予は予の理性の光をして常に倍〻活潑に堅實に發越照著せしめんことを期す。是れ予が一貫の態度也、又態度たるべき也。見神の場合に於ける、予は亦



復た嚴にこの態度を取つて點檢數番せるにあらずや。(予は予が見證の眞理を天下に發表するまでに幾多時の覃思精慮を經たるなり。)爾時予の理性は十二分の自覺を揮揮して、一擧してこの祕密の神砦に肉薄したりき。されど驚くべし、さしも鋭かりし予が理性の鋒刃も、段々に折れてけし飛んだり。嗚呼理性の權能や大いなり、何人か能くその神聖なる批評圏外に立つことを得べき。まかも見よ、理性の電光は、唯だ事實の堅岩を繚り照らして而かも竟に之れを透破することを能はざりしにあらずや。そは竟に難入なりき、難透なりき。理性は謙して自家正當の地位を自覺し初めぬ。而して歎じて曰へらく、稀有なるかな、微妙なるかな、絶言亡慮の德相なるかなと。是くの如くにして予が見

神の意識は、正さに全人上の事たり。一閉の罅隙を容れず。

或は見神の事、畢竟藝術上の神來に飜して說くべしと謂はん乎。さなり、二者その事態の形式に於いて畧〻相殊なるふしはあらず、唯だその內容に於いて一は美的妙想の滾々として興來し、他は天地の實在の咄々として現前するを見るのみ。神來と默示と、同じ一念の思慕を湛へて感應の對象を寫し出づるもの。彼れは美を抱き、此れは神を抱く。共におなじく戀して戀を得たるものにあらずや。之れを主觀の創造といふ乎、客觀顯現の權威の枉ぐべからざるものあり。之れを客觀の顯現といふ乎、主觀創造の自由のこころも與りぬ。創造乎、顯現乎、我れより見て創造といふべく、彼れより見て顯現といふべく、創造と顯現と、所詮は一にして二ならず、之れを合して唯だ妙法といふ。神來は妙法なり、見神は妙法なり。

さはれ、嚴密にいへば、神來と默示とは、意識の形式に於いてだに到底差別あるべし。前者の場合に於いては、自由創造の意識饒かなれど、後者の場合に於いては、さる意識は殆んど無く、寧ろ客觀なる眞理(神其他のもの)が不可抗的に我れに滋み來たるの意識をもて勝れり。少なくとも予が「見神の實驗」の刹那の意識は、是くの如くなりき。「天地の活物とは、たと行き會ひたるやうの感」云々と記したるもの、正さしくこの客觀的意識の寫實なり。或は「予が見神の實驗」を以て詩的表現に過ぎたりとなすものあり。果たして然る乎。神に接しては凡夫も金口の佛たり。絕言の境は詩語

燦として華さく所にあらずや。予は寧ろ顧みて予の詩語貧しきを歎ずるもの也。

予や神を見たりといふ。而かも神や蕩々無方、到底智量を絶するの大海たり。われや唯だその靈しき一波の滴り、を歸依淺き心の小貝に汲み得たるものなるべきのみ。峯上の峯、燈外の燈、誰れかは所詮辿り盡くせぬ實在の寂びしさに孤獨無限の思ひを抱かざるべき。されど感謝せよ、我れには我れの見得せる神あり。わがみづから見たる神、是れ活ける唯一の神にあらずや。こゝに平和あり、歡喜あり。一念の裡、春風永しへに蘼蕪を吹く。われは神を見て神の子たるを自覺し、神子の自覺は予が徑ちに神に接して神より得たるもの、前人の意識を襲取したるにあらず。但だ見



神の意識に含まれたる予と神との相卽微妙の關係は、予をして父子といふ如き詮表形式を藉り用ふるの外、他に適當の語なきを感ぜしめたり。この點に於いては予は先覺殊に基督に負ふ所多きを自白す)而して神の子の自覺を得て人生の意義白光の如くに耀くを見たり。わが解脫三昧は成りぬ。乃ちわが靈魂は起つて神を讃美し、而して「爾の自覺を爾の同胞に傳へよ」との貴き使命の聲を聽きぬ。予れは正さに第一の產みの苦しみを做し了へたり、今や第二の產みの苦しみを做すべき也。

あゝわが見神の眞理は、わが冷靜なる幾番の回想、幾番の省察、幾番の批評の鋒に研ぎ磨かれて、今や精金美玉と輝きぬ。時は到りぬ。われ今おふけなくも此の一大事因緣を

天下に宣べ傳へんとす。われこれを今の世の自大聰明の學者先生に說かず、又之れを眞理の實驗饒かなる覺者先達に傳へず、唯だ中心の悲哀を抱きて、謙虛、神を慕ふ世の未見の友に之れを頒かち傳へんとはする也。あはれ、世の神に憬るゝ未見の同胞よ、爾の心を喪ふと勿れ、爾の心を强うせよ、雄々しかれ、喜び勇めよ、平安と生命と光明との太源なる天地の父を見たるもの、こゝに立てり。われはいと小ひさきものなれど神の子の一自覺者也。來たつてわが見たる光榮の神を見よ。若しくはわが言を通じて之れを信ぜよ、而して爾の生命と平安と光明とを得よ。

予は予が見神の自覺を必ずしも希有の出來事として世に宣播せんとするにあらず。（予は常識上よりも見神の自覺を甚だしき希有異常若しは不可能の事なりと惟はず、況して之れを迷信視するが如きとをや。若し斯く見る人あらば、是れ餘りに人類を蔑視し、人性發展の可能を局限せるもの、若しくは人生の神祕に驚くの官能を缺けるものと評すべし。）わが今日の靈界には、この類の實驗に沈潛游泳する自覺の士、思ふに多々なるべし。彼等をして彼等たらしめ、而して予をして予たらしめよ。彼等と予と何の關りあらんや。予は彼等に對つてこの眞理を瀆告せんとするものにあらず、唯だ世の悲哀煩悶の友に、予が見たる喜びの福音を傳へんとはする也。予の要請は極めて謙遜也。

又思ふに、予は眞理の播種者也。之れに培ひ之れに灌ぐものは、感應ある諸君也。而して之れを長つるものは神也。

予と諸君と何の誇るべき所かあらんや、讃むべきものは唯だ神也。

嗚呼われいと微き神の僕の一人にしあれど、神はわれをして世にも妙なる眞理の醍醐味に醉はしめたまひぬ。わが語るはわが衷なる眞理の語るなり。この眞理を世に宣べ傳へんがためには、わが枯槁の殘生、抛ち去つて復た惜しからず。若しわが宣ぶる所、能くこの淺ましき流轉の海に漂へる同胞の一人をしてだに、一歩を安立の岩根に寄り近づかしむるを得ば、一期の歡喜何を以てか加へん。嗚呼われ自ら僭して眞理の證明者たらず、われは心謙りたる神の傳燈者の一人也。自ら省みるに、われは決して自大の宣言者ならず。われ病めりと雖も心眼瞭かに、われ弱しと雖も



神に在りて强し。たとひ世を擧げてわが所證を無みすとも、われは尙ほ自家心證の權威に立つて、神と共にこの眞理を宣すべし。希はくは我等をして、常に我執と偏見と氣習と驕慢と敎權とを超脫し、虛心にして我等が胸臆の底なる天地の法音に參ぜしめよ。夫れ眞理は常に我等と偕に在れど、我等之れを覺らず。自覺せよ、今は自覺の秋也。

重ねて曰はく、見神といひ、神子の自覺といふ、談まことに容易にあらず。王陽明の所謂「千古聖々相傳一點滴骨血」の語、移し來つて必ずしも、失倫ならず。人の若し、この類の眞理を一場の閑話頭と做し了ふる者あらん乎、われまづ起つて彼れに三十棒を快喫せしむべきなり。されば、われを以て奇矯世を驚かすの言をなすものと思ふ勿れ、若し一毫さ

る心のわれにありもせば、神斧森然、立ろにわが頭上に下るべきなり。われはまた古來幾多の先覺に對して、敢へて一家の異を樹てんとするものにもあらず。唯だ先覺の所證を述ぶるよりも、神より直接に得たる予みづからの自覺を宣ぶる方、一段明確にして予が良心の指示に適ふものあれば也。わが世に屬ける常識は、わが態度と主張とを狂とし笑へど、わが眞の常識(靈識)は「爾の所證の權威に立つて之れを世に宣べよ」と嚴かに命じぬ。われ今此命に從うて起たんとす。吁われ狂せる乎、決して然らず、われは「神の子」の權威に醒めたる者の一人なり。わが衷心の願ひは、われと同じ心に目醒めたる他の一人の同胞をだに得んと也。願れば、我れ敗殘の一病客、世味すべて夢よりも淡きが中に、猛烈已みがたき望みは、唯だこの一事のみ。若し一人眞に「神子」の自覺を有するものあらば、誠に人類の力也。若し二人以上この自覺を有するものあらば、そこに「神國」の實現あるべし。眞理は究竟して極めて單純也。人生一切の問題に對する最根本的解釋は、唯だ繫りて「神の子」の一自覺に存するにあらずや。われに如是の信あり。かるが故に、われ憚らず起つてこの眞理を天下に宣す。

（明治三十九年一月）

# 如是我證

「神と偕に樂しみ、神と偕に働く」。是れ「吾れは神之子也」てふ一個の眞自覺に立てるものが、開花流水の、おのづから到り得べき悟境にあらずや。窃かに自ら信ずらく、宗教の極致、信仰の要諦、究竟して唯だこゝに在りと。「神と偕に樂しみ、神と、偕に働く」。是れわが當下唯一の生活態也、稱名也、祈禱也、讃美也。

「神と偕に樂しむ」。予をして先づ此の一句義の消息を述べしめよ。

直觀すれば、吾等衆生は皆神の子、如來の子として、同じ妙なる天地の調べに心跳るべきものならずや。而かも世の



多くの同胞は常に色身の迷執に縛られて、天地の太源を仰ぐことを打忘れたり。詩人の所謂「宿習の霜威」に、戀ひしき天なる故里の父を慕ひ求むるの心を閉ぢ塞がれたり。哀しむべし、彼等は全世界にも換へがたき天地の嫡子たる自家本來の權威ある榮座を抛つて、蟲蛄螻の如く淺ましき運命の穢土をさすらふなり。されど見よ、彼等は天なる父を忘れ、無みし、打遺てたるに、彼等が天なる父は、恆久不易の愛をもて、彼等が運命を導き護りたまふにあらずや。彼等は「彼」に負けども、「彼」は彼等に負きたまはず。彼等は彼れを自覺せざれども、彼れは束の間も彼等を忘れたまはず。彼等の迷へる時、彼れはその慈光の燭をさし向けたまふにあらずや、彼等の喘ぎ苦しむ時、彼れはその不可見の手をそと其の

重荷に打添へたまふにあらずや。悲しむ時彼れ亦悲しみ、喜ぶ時彼れ亦喜びたまふ。一切事、一切所、彼れは毎に我等と偕に在まして、所謂蔭になり日向になりて、その親ごゝろの大愛を打灑ぎたまふ也。謂ふと勿れ、是れ詩的形容の辭と。あらず、是くの如きは不斷に神の大愛に生くるものの實證語也。釋迦といはず、基督といはず、古來の先覺は、皆この一自覺、一心證を下土に宣べんがために世に出てたり。あらず、彼等が同胞衆生の爲めに打そゝぎたる慘痛の血と涙とが、やがて天地の大愛そのものの火の如き發現實證にあらずして何ぞ。かくて神は、我等が胸臆の裏より、常にその不可見の手もて我等を招きたまひつゝ、こゝに來よ、而して爾の眞の父を見よ」と宣ふ也。志かも我等は、この雷の如き無聲の聲を聽かず、潮の如き無言の感化を得覺らず、われとわが世の榮えと幸とを打すてて、定めなき運命の嵐に、蓬髮亂鬢の姿淺ましう、人生の荒野を左迷右行するにあらずや。覺者之れを見る、眼底涙なからんや。乃ち叫んで曰はく、自覺せよと。自覺者畢竟如何の光景をか見る。

それ一切は神に在りて生く。一塵一砂、神に在りては、皆久遠の大光明也、大法輪也。神之國には死なく、否定なく、破綻なく、空虛なく、不調和なし。詩人乃ち歌うて曰はく、

"Spite of pride, in erring reason's spite,
One truth is clear—whatever is, is right."

「在るもの皆善し」。是れ實に本地の風光に參したるものの發する游泳歎美の語にあらずや。

「在るもの皆善し」。之れを萬有の相關上、形式上より見るを其の一義とす。見よ、宇宙の間に在るもの、何物か皆おのがじゝなる不易の位置を「全一」の大有機系中に占斷せざる。綿蠻たる黄鳥は丘隅に止まるとぞいふ。止まるを知つて止まるは、おのづからなる物の性也。一絲鬆まず、一石錯らず、我等が見て鬆めりとし錯まれりとするもの、神に在りては、やがて無限の充實也、調和也。かくて萬法渾然、皆己れを正して神に嚮ふ。

「在るもの皆善し」。之れを實相所含上、內容上より見るを其の他義とす。こゝには、在るもの皆實相合理のこゝろ深きを謂ふ也。山色谿聲も佛陀金口の眞實語ならずといふとなく、一香一色も實相中道の轉法輪ならずといふとなし。





この甚深の理を觀じて、關尹子は曰はく、「一物も天に非ると無し、一物も命に非ると無し、一物も神に非ると無し、一物も玄に非ると無し」と。莊子は曰はく、「道は螻蟻に在り、稊稗に在り、瓦甓にあり、尿溺に在り」と。ポープは曰はく、「神は一髮裡にも心情に於けるが如く充ち且つ完し」と。この類の辭、一々擧げ來たらば、卷をもなすべく、庫にも滿ちぬべし。げに、一微塵裏にも全法界に充實せる神の姿と悅とを圓かに寫し湛へて、當處洋々たるもの、やがて諸法實相の光景なるかな。

この實相上の二意義を括りて、我れ再び如是の觀をなして曰はく、「在るもの皆善し」と。夫れ我等が僞也、醜也、惡也と觀ずるもの、やがて神に在りては皆眞也、美也、善也。我等ま

た無常迅速を悲しみ、生滅變化を歎くと勿らむ。無常迅速や、生滅變化は、是れやがて神が依りて以て常に働く自性內在の則也、道也。一切轉化の事相、詮じ來たれば、神が自觀の姿也、自交の語也、自運の跡也。そこに何の無常と生滅と虛妄とあらんや。柳は散り〳〵常住の姿美くしう、花は咲き〳〵實相の意圓か也。一切の事、觀じ來たりて、猛き河波の暫しも止まらざる姿を其のまゝに、湛然として、大いなる現在」の愛の懷に游ぐ也、休らふ也。微塵も曾て失せず、萬法攝取の光遍照せり。あはれ、前影後影、取次に送り迎へて、自家の面目自から圓現すなる、かの廻り燈籠の姿こそ、やがて實相不盡の燈の光景にもあるかな。物皆還り旋りて、恆轉不變の神の意ぞ著るき。天地は一個の大廻燈也。森羅色を染めて、永へに大劫の柱を旋る。吾人をして神と共にこの自然と人生とを繞り彩る無限の大燈影を靜觀せしめよ。一切は卽「物と與に春を成す」萬法の樂意に相參せしめよ。

て妙也、眞也、道也、神也。鳶飛び魚躍る、復た何の按排ぞ、何の計較ぞ。活機縱橫、而して之れを貫くもの唯だ一誠あり。

吾人は則ち羅馬の古哲人と共に讃美の聲を揚げんかな。

嗚呼大宇宙よ、爾に調和するものは凡べて吾れにも調和す、爾に適はしき「時」は、復た吾れにも早からず晩からず。嗚呼大自然よ、爾が四季なり〳〵の生產ものは、凡べてまた吾れの有なり。萬有は爾に出て、爾に保たれ、又爾に歸る。嗚呼愛しきかな神之都。

と。

吾人は如是に圓滿自足の神を描きたり。彼れは一切を束ね、括り、結び、充たして、當處に洋々たり。嗚呼美はしくも

又樂しきは神が萬法自觀の光景なるかな、而して何の祝福ぞ、吾等も亦神の子たるの權能に於いて、不斷にこの天地の大悅に參與するを得べしとは。吾等は神にあらず、吾人をしてこの自大冒瀆の語を呪詛せしめよ、あらず、吾等は神之子也、如來之子也。神の子てふ一自覺は、人類が自己の眞地位を最も明瞭適切に直觀したる語にあらずや。神の子は全能にあらず、彼等に不盡の悲哀あり、されど喜びたのしめ、「吾が天なる父の家には第宅多し」。吾等は神の子たるの光榮に於いて、不斷に神の懷にありて、悠々として一切を眺め樂しむを得るにあらずや。神は、吾等最も罪障まげく、迷執多き者のために、其の最愛の嫡子長兄を殺したまふにあらずや。吾等は神にあらず、されど吾等は神と偕に在りて、一



切の王者也、所有者也、支配者也。「唯我獨尊」といふ乎、これ吾等が神之子として、神と偕に天地の榮座を分かつの意に於いて眞也。「萬物吾れに備はる」と謂ふ乎、これ吾等が神之子として一切を彼れより受領し分有する意に於いて眞也。「吾等は何の受領はざるものを有つ乎」。一切は恩寵也。されば感謝せよ、吾等に人生無量の涙あれど、そは凡べて神に在りて拭ひ淨められたるにあらずや。吾等に不言の要めあれど、そは凡べて神に在りて充たされたるにあらずや。噫、爾悲哀之子よ、仰いで天なる父を見よ。天なる父の光榮の國を見よ、爾が渴仰要求せる一切は久遠劫の昔より、一髮も驚けず崩れず、既に業にそこに備へ完うせられたるにあらずや。大愛の父は、吾等が欲し求むるの前より、既に吾等

かために一切を充たしたまへり。吾等之れを憶ひて、一念踊躍す。謂ふとを得べし、吾等は未だ得ずして既に得たりと、未だ見ずして既に見たりと、未だ會はずして既に會へりと。「盡日尋春不遇春、春在枝頭已十分」といふもの、移して以て這般靈界の消息に擬すべき也。

されば眞に神を見て神之國を吾が有とせる偉いなる靈界の勇者に聽け。曰はく、「爾曹恐るゝと勿れ、我れ既に世に勝てり」と。こはこれ堪へがたき人生の重荷に喘ぎ苦しみつゝ向上の一路を辿る世の悲哀の子等に開示せられたる未顯の眞實にあらずや。何等恩寵の語ぞや。げにこの語を發したる勇者には、現實の世の一切の障碍は、復た喪心の源とならざりける也。深く未顯の眞實に游泳せる彼れは、既にそこに久遠劫の初より光榮ある勝利と充實と法悅とを縱まゝにし得たりければ也。むしろ彼れは、この未顯の眞實を世に宣して、一切衆生を救はんが爲めにこの土に來たれる也。基督然り、釋迦然り、世の偉大なる自覺者皆然り。彼等の使命や決して空しからず。彼等は神之人也。かるが故に、彼等は人生最慘痛の死の淵に落んでだに、尙ほ法音朗々、「我れ世に勝てり」と謳ふを得るにあらずや。嗚呼我等は既に世に勝てり、我等は神と偕に一切の王者也、享樂者也。一切は神の大愛の懷に、諸法實相の花と開きて、老いせず、朽ちず。されば我等復た何をか歎き、何をか悲しまん。我等をして涙の中に笑はしめよ、苦しみの中に樂しましめよ、蹉跎顚倒の中にありてだに、未見の法悅に悠々たらしめよ。

我等の涙をして甘美の涙たらしめよ。それ「在るもの皆善也」。そは神と偕に之れを樂しめば也。

「神と偕に働く」。予をして次ぎにこの一句の意を味はしめよ。

「在るもの皆善し」といふ。されど吾人をして輕々にこの語に躓くと勿らしめよ。それ「在るもの皆善し」とは、畢竟ずるに吾人が通常謂ふ所の「在り」と「在るべし」と、「現在」と「當在」との對峙を實相一如の光景に融會せしめて見たる時の語、他語もていへば「現在」と「當在」との高低階を、更に「大いなる現在」てふ一平面に押しならしたる時の語なりと知らずや。夫れ一たび絶對峰上に立つて實在の千波萬波を瞰おろさんか、一切は皆唯だ「現在」の眞あるのみ、美あるのみ、善あるのみ。

そは皆絶對善也、絶對眞也、絶對美也。煙波萬里、蕩々として横に諸法實相の海を開けり。こゝに一不完なし、一罪障なし、隨つて一「當在」なし。自足の神也、圓滿の神也、充實の神也、大現在の神也。一切は皆在るがまゝにて善也。不老常住の月、圓かに諸法の花を照らして、淨樂永しへに磬くるの期あらず。されど飜りて諸法實相を差別發展の現實界に織り出づれば、こゝには「在り」と「在るべし」と、「現在」と「當在」との對峙鏗然として現じ來たる。之れを一念の迷とすると勿れ、是れ常識自證の眞事實也。現在と當在、卽ち事實と理想との戰を外にして、人生の意義あらず。人生は無窮の戰也、向上といひ、進歩といふもの、皆こゝに源を發し來たる。横より見て實相一如の海と開くもの、縱に仰げば理想の峻峰

永しへに天を攢して、分け登る人生の一路、常に崎嶇たり。何が故に實相一如の海が、理想現實の險はしき峰と聳え來たるかを知らず。唯だこの事實に面しては何人も之れを得否まじ。吾人乃ち觀ずらく、吾等は弱し、當さに强からざるべからず、吾等は完からず、當さに完からざるべからず、吾等は迷執之子也、解脫徹底の人たらざるべからず、人生は穢土也、涙の谷也、之れをして安養淨樂の土たらしめざるべからず、現在の社會組織は不備也、須く之れを改善すべし、現在の國際關係は非也、須く之れを平和人道の關係たらしむべしと。詮じ來たりて人生一切の事、皆この「在り」と「在るべし」との一商量に鍾まる。不可思議なるかな、我等が見て在るべき理想となせるものは、卽ち深き意義に於いては久遠劫の太初より既に在るの事實たり、究竟して既に在るの事實が吾人現實の意識に發しては、未だ在らずして當さに在るべき理想たり。いかなれば、この大いなる矛盾(矛盾と言ひ得べくば)を營まざる可らざる乎を神に問はんは我等が分ならず。唯だ現實の世の營みを一夢と觀ぜざる我等は、飽くまでも迷はず、疑はず、既に在りて未だ在らざるこの理想の一途を無窮に蹤ふべき也。故に曰はく、「神と偕に働く」と。

「吾が父は今に至るまで働き給ふ、われも亦た働く也」。世界は神の大工場也、大田園也。天意流注の痕、歷々讀むべし。我等、神之子の自覺に立つて、大父の經綸に參し、謂ふ所「世界之進行」に一轉歩の力を貢するを得る、何等の光榮ぞや。達者卽ち歌うて曰はく「帝生萬物靈、使之亮天功」と。我等はこ

れおの〳〵自家分上の天功を亮くる一個の天子にあらずや。但だ天功を亮けて働くといふ、卽ち歸する所は竟に理想と現實との嚴肅なる戰ひならざるべからず。而して現實の世に百缺陷あり、百罪惡あり、これ事實也。誰れかいふ現實の事、在るがまゝにて善也、美也と。罪惡は在るがまゝにて善ならず、殺人は在るがまゝにて善ならず、戰爭非也、帝國主義非也、產業組織非也、文明亦非也。現實に百非あり、百不完あり、誰れかいふ、世事一切在るがまゝにて善也と。若しまかいふものあらば、私欲も、利己も、我執も、痴妄も、瞋恚も、顚倒も、亦復た一切あるがまゝにて善也と見るべきか如何に。何が故に世界は煩悶し、人類は精進する、他なし不斷に現在を不滿として無窮の理想天を慕ひ躋るが故にあらずや。世は初めより完からず、人は不斷に理想に躓く(神ならぬ吾等、誰れか亢顏吾れに罪なしとはいひ得る)。世界と人世と、詮じ來たりて大いなる理想發展の歷程なり。誰れかいふ、一切は在るがまゝにて善也と。若し依然として之れを眞面目に主張する者あらば、そは强ひて一切の事實に眼を蓋へる者なる乎、然らずんば未顯の眞實(予が曩に神と偕に樂しむの方面として描きたる諸法實相、平等一如界の光景)に游泳して發すべき信樂の語をば、漫然この現實の差別界に移して發したる混亂の見なるべきのみ。諸法實相の神の國に見たるものやがて必ずしもこの現實界の光景そのまゝなりとはいふべからず。現實界には缺陷あり、迷妄あり、隨ひて戰ひあり、進化あり、發展あり、これ事實也。吾人

は、かの漫然として、この現實界に於ける「在るべき」と、事實と理想との嚴肅なる對峙を沒却し去り、而して一切は在るがまゝに善也と謳歌する一派の淺薄なる非事實的樂天家に與みせず。彼等は概ね發展進化の思想を闕如せり。彼等は嚴肅なる人生の事實を餘りに輕視せり。（宗教家の思想にこの弊殊に多し。）夫れ「在るがまゝにて善なり」てふ語は、一切の理想の實現し盡くされて、永しへに不老常住の「大現在」となれる實相一如の世界を觀じてこそ發すべき達觀の語なれ、信念の語なれ。これ事實也。されど之れと同時に理想と現在との對峙を有するこの差別現實の世界も亦事實ならずや。彼れ固より否むべからず、此れも亦沒すべからず。但だ彼れに於いては、平等に顯現せる神が、此れに於いてはその顯現に高下大小の差別ある也。道は佛にありて一毫を增さず、凡夫にありて一絲を減ぜずとは、これ我等が未顯の眞實を達觀したる信念上の語にあらずや。現實の事相界に立つていはば、凡夫に於ける佛性、神性の顯現は、明かに佛陀覺者に於けるそれよりも貧少なりとせざるべからず。ポープが、神は一髮の中にも心情の中にも同樣に充實せりと觀じたるはむしろ信念の語也。事實に於いては、神が二者に於ける顯現の內容に、多少厚薄の差あるよ、誰れか否まんや。基督に顯はれたる神はイスカリオテのユダに顯はれたる神よりも大い也。釋迦に顯はれたる佛性は提婆に顯はれたる佛性よりも大い也。是くの如くに觀じて、現實界に於ける一切美醜善惡の價値、森然

として其の色を別かち來たる。漫りに美醜善惡の價値を拂拭し去ると勿れ、價値は畢竟現實の一切物に於ける佛性顯現の多少、神性發展の高下より發し來たる眞實無妄の差別に非ずや。吾人は信念の世界に於いては、一切の價値を超越し(統一的に)、事實の世界に於いては、萬殊の價値別を認識す。彼れも眞實無妄、是れも亦眞實無妄。信念を以て事實を空視し抹殺すると勿れ、寧ろ吾人をして信念を以て事實に勝たしめよ。信念に立つて事實と戰ふは吾人の態度也。漫りに善惡の價値別を輕視すると勿れ、價値の色彩ありて人生一切の事、始めて意義あり、向上あり、發展あり。

嗚呼誰れかいふ、人生一切の事在るがまゝにて善也と。一切は在るがまゝにて善ならず、之を善ならしむるは吾人の信念也、理想也。古人もまた、神を信ずるものには、一切の事、皆働きて益をなすといへり。事實は信念に打勝たれてこそ始めて善美の光を放て。我等に「世に勝てり」の信念なくして、いかでか「一切皆善」の大觀あるとを得んや。吾人は吾人の理想信念に立つて、事實と戰はざるべからず。戰つて後にこそ善あれ、在るがまゝにて善なるにあらざる也。故に曰はく、神と偕に働くと。

予は更に上來の觀を一、自覺に攝して、以爲らく、吾人の活動には常に大安息あり、吾人の戰には大平和あり、何が故ぞ。吾人は神と偕にこの世の理想現實の最嚴肅なる戰に參すると同時に、又神と偕に未顯の眞實に游泳して、「萬法皆善」の法悅を分有するとを得ればも。內常に充實の樂を湛へて、

外常に健闘の誠を有するは吾人が理想的態度也。　實相之神(法身佛)と偕に悅樂し、理想之神(報身佛)と偕に勞謙す。　彼れはスピノーザ、婆羅門等の神にして、此れは正義一貫之力を見たるマッシュー、アーノルドの神、若しは世代を通じていやのぼりゆく一大目的を觀じたるテニソンの神、乃至は「人は一部に於いてあり、全部に於いてあるとを望む」と歌へるブラウニング等の神にあらずや。　一を觀美的といふべくば、他を倫理的といふべく、一は常樂の大現在を湛へたる法性之神、他は火の柱、雲の柱となりて、不斷に吾人を彼岸に導きたまふ理想之神、進化之神也。　而かも究竟して、唯だ實有一乘の神の、二面の世界に顯現して、我等衆生が渴仰の標的となれるものに外ならず。　吾人の神は、尊者オーゴステンの所謂「常に働きつゝ常に息へる」神也「常に求めつゝ而かも一切を有てる」神也。　この意味に於いて吾人の神は一體二面の神也。　一面の神に參しては、悠々として樂しむ、わが世の春は永しへに寂びしからず。　他面の神に參しては、堂々として働く、われらが氣力則ち餒ゑじ。　故に曰はく、神と偕に樂しみ、神と偕に働くと。

夫れ未顯の眞實を達觀して「一切皆善」の信念を有するものにありては、人生に於ける理想現實の戰そのものが、佛者の所謂自然法爾の發動也、彼れにありては、偉大なる積極的活動そのものが、やがて大慈恩寵のおのづからなる流露也。こゝには最早自力も他力もあらず、我が行ふ所が卽ち神の行ふ所、我れ生くるにあらず、神我に在りて生くる神我一如

の自在境也。如是の人も、尚ほ時には理想の一路に躓くとありぬべし。世に在りては、誰れかこの苦き涙なからむ。されど神を信ずるものの涙には、常に光輝あり。彼れは敗ると雖も、常に勝てり。神と偕に樂しみ、神と偕に働けば也。而してこれ實に理想を單に理想としてのみ追求する倫理道德の解し得ざる所也。

（明治三十九年一）

# 自覺小記

「天地は失せむ、されど吾が言は廢たらじ」。
爾の見たる所、信じたる所を憚らず同胞に頒かち傳ふべし。

觀ずれば吾等一切衆生は久遠劫の始めより神の懷に抱かれたる神の子也、如來の子也。自覺すると自覺せざるとに論なく、事實に於いて皆然り。吾れ劣機下根、而かも何の幸ぞや、この惠み深き自覺の一日に入ることを得たりしは。一期の歡喜抑へあへず、乃ち起つてこの自覺を天下に傳ふ。

吾れは一切の敎權、形式、習慣、常識、偏見、我執の束縛を脫して、方に纔にこの一自覺を得たり。見よ、久遠劫來の天地の法音は、靜夜の大空を流るゝ無碍の星光の如く、いとさやか

にぞわが心の緒に響き傳はりたる。それわが見たる神は詩人の描く賦彩形容の神にあらず、哲學者の考ふる概念抽象の神にもあらず、世の所謂宗教家の主よ〳〵と呼ぶ名目の神にもあらず、科學者の所謂腦細胞の空華にもあらず、異象、幽靈、化佛の類ひにもあらず、はた又ルソー等の衷心の寂びしさに得堪へて其の存在を念じ出だざざるを得ざりし單なる主觀要求の神にもあらず。吾が見たりし神は、事實の神也、意識直接の自證の神也、當面現前の神也、咄々、こゝにと驚きて叫ばざるを得ざりし神也。何等の新鮮、何等の光耀、何等の活潑、何等の靈動。爾時實に神は天地の奥底より躍り出でて、端的に吾れに格り、吾れを捕らへたるなり。その刹那、吾れは世にも希有不可思議なる神の虜となりて、浩々として禦ぐべからざる神の靈しき働きの一機關とはなりけるなり。（誰れかこの意識を描き得んや、覘ひ得んや、評し得んや。）吾れは驚喜と敬畏とに心溢れて、わが神の光榮と權威とを打ぢまもりたるに、げに全く人の世の言語に絶したり。不可稱也、不可說也、不可思議也。吾れは正さしく天地人生の神祕の太母に接したるなり。

天地に大靈あり、大靈一夜小靈に言葉を傳へて（この現前の意識は予の一生忘るゝ能はざる所也）吾れをして天人父子の微妙の消息に心躍らしめぬ。人よ喜べ、思へば吾等は皆世の始めより天地の大靈と共在せる神之子、如來之子なりけり。われ多年、朧げながらにこの幽玄なる消息を摸索百端して、擾れ、ごゝろ已みがたかりけるに、今や洞然として、

この奥義に徹することを得たり。われ自大の夢に自ら欺き他を給かず。わが語る所は眞理也。（而して眞理を知る者は唯だ眞理なり。）但だ父子といふ一類の語、餘りに人閒的なるの嫌ひあるに似たれど、わが自ら經たる所によりて、神と吾れとの關係の萬一の相をだに寫し出てんには、いといと覺束なき輪線ながらに尙ほかゝる一味人的比論の語を用ふるの外なきを感じたるなり。かくて吾れは基督其他先覺の毎に用ひたりし件の語を襲用するに至りぬ。予は漫然として無用意に前人の聲に和したるにはあらざる也。

吾等は久遠劫來の神子也。あゝこれ何等の偉大なる福音ぞや。吾等人類は偶〻逝波に點じてやがて音もなく消えゆく白雪のはかなきたぐひにはあらず。遽然として自覺し來たれば、吾等は是れ進化といひ發展といふ一種の形式、方法に因りて、堂々とこの現實界に顯現しつゝある法身一味の金枝也、玉葉也。吾等が家は卽て三世常住の神の家にあらずや。

哀しむべし、吾等は三世實相の父の家を迷ひ出でて、遠く無明客塵の巷に淺ましき一日の生を貪る。習性の薫ずる所、竟に父を忘れ、家を無みして、空しく乞兒狗蓄の群に墮せんとす。慈眼の天父、乃ち吾等を搜し索め、高く聲を擧げて、吾等を招還し給ふ。吾等がその折〻の機緣に觸れて、そこともなく天なる父を慕ひ索め、憬れ惑ひ、而して竟に一朝豁然、父子本來の關係を自覺するに至るは、畢竟この親ごゝろの感應にはあらじか、神の本願力の吾等が心情に通徹した

るにはあらじか。（說きかた極めて詩的なれども、かく說かざるを得ざる最深奥の事實なるを如何にせむ。）われは今更のやうに『法華經』の長者窮子の譬喩、乃至は『聖經』の放蕩息子の譬喩の甚深の意義に玩味し到るを禁ずる能はざる也。『易』に曰はずや、「鳴鶴陰に在れば其の子之れに和す」と。嗚呼吾等、今は飜然神の子てふ光榮あり權威ある自家本來の自覺に立還りて、天父の大愛に應和すべき時にあらずや。

基督この自覺を握りぬ。その他多くの先覺亦復た然り。吾等はたいと微きものなれど、一たび面り神に接して神子の自覺に入るとを得たり。思ふに一切の同胞皆等しくこの自覺に入るべき權能あり、入るべき筈也。かくてぞ吾等は皆天なる一人の父の愛に連なる兄弟なる。いかなれば世の徑々の徒、特り釋迦、基督をのみ人類以外の聖なるものとし別かちて、永しへに之れを神祕龕中の偶像とは做し了はらんとはする。天分の高下は言はでもあるべし。さはれ、彼等若し神の子ならば、吾等も亦ひとしく神の子ならずや、彼等もし神を、如來を父と呼ばば、吾等も亦まか呼び得るならずや。吾等迷ひに迷ひを重ねたれど、悟ればやがて神子也。彼等もし假りにこの土に肉身を化現したる久遠の語、道、乃至應身佛ならば、吾等にも亦久遠劫來神の懷にあるの自覺あるに非ずや。はた又彼等は衷に不斷の神在の自覺を有しきと謂はん乎、吾等も亦同じ自覺に、一念の踊躍禁じがたきものあるにあらずや。げにや彼等は所謂「人中尊」なるべし、而かも彼等は竟に吾等が同胞ならずや、然り、彼等

は所詮吾等が自覺の長兄なる也。吾等が眞の父は、高きに在ます一人のみ。

それ渺茫たる眞理の王國は、吾等が直覺の新啓示に依りて、不斷に開拓闡明せられつゝあるにあらずや。想うてこゝに到る、誰れか崇高の一念に打たれざるべき。直覺は事實を創造し、理知は唯だ之れを解析し、推演す、直覺は新眞理を啓示し、理知は唯だ之れを排列し、比較す。理性や知力は、到底直覺の前に跪きて其の材を仰がざるべからず。思ふに知と言はず、情と言はず、意と言はず、吾等の全人が、事に觸れ緣に接して、わが內在の佛性、神性を實現する所、そこに新眞理の啓示はあるなり。かくて吾人に直覺の存する限り、眞理の啓示發展は無窮なるべく、理知は唯だ永しへに其の事實の後を趁うて奔るべきのみ。されば世の所謂學者をして、說明し批判する前に、先づ事實と眞理とを直覺せしめよ、之れに觸れしめよ、之れを味はしめよ、之れを感得せしめよ。かの曾て一たびも神に對する思慕、要求、煩悶の經驗を有したることなく、況して之れに觸れたることもなく、其の神祕なる人格的感應の消息に接したることもなく、而して曉々として神の有無を論じ、神の人格性を難じ、乃至は宗敎的信仰の合理性を評せんとするが如き、是れ、いさゝかも美術上の趣味のたしなみなく、鑑藻力なき徒が、喋々として、雪舟、ラファエルの繪畫を品評すると擇ぶ所なきなり。所詮かゝる輩は、この一境に容喙の資格なきものなり。其の言說の空疎、力なき、また異しむに足らざる也。

之れを約するに、眞理の應用は極めて複雜多端なりとするも、眞理の原理は、極めて單純、自明、而して又極めて深奥也。「神之子」の一自覺の如きは、正さしく是くの如き眞理の資格を具へたるものにあらずや。　神子の一自覺を握れる者は、是れ一切の德教問題、社會問題、人道問題の最根本的解釋の祕鑰を握れるものといふべきなり。　嗚呼この眞理よ、一見極めて迂遠なるが如くにして、而かも思を覃うして其の意義を味へば、世にこれほど沈痛深奥の解釋を人生一切の問題に與ふるものはあらざる也。　平和、光明、活動、發展、進歩の福音、一に萃まつてこの自覺にあり。　美術といひ文藝といふ、其の立脚の根柢は竟に亦こゝに見出だし得べきなり。「救」はれてこそ文藝の花も愉しけれ、自己存在の眞意義を自覺せずして、文藝の絶對價を說くものあらんか、われは其の絶對價てふものの內容の餘りに貧しきを疑はずんばあらざる也。　吾等は何をさし措きても先づ眞に生くる所以の道を講ぜざる可らず。　眞生命なくして何の美術かあらんや、何の文藝かあらんや。　或は文藝そのものこそ吾人に眞生命を與ふるものなれと謂はんか乎、予は所謂文藝の貴ぶべきを知る、その一時的解脫の緣を供するを知る、而かも所謂文藝は竟に吾人の靈魂を救ふの器にあらざる也。　或は吾人は哲學又は文藝等に因りても安立し得ざるにあらずといふ。　されど予を以て見れば、吾人は到底哲學又は文藝等に因りて、眞の空虛なく矛盾なき充實徹底の安立を得る能はず。　少なくとも、予が實驗は、かく斷言するに躊躇せざる

也。然らば何物か眞に吾人を救ふの力なる、曰はく、神子の自覺、是れのみ。少なくとも予は信ず、この一自覺は人の靈魂を救ふ最有力の眞理也と。若し之れを宗教と謂ふべくば、是を宗教と呼ぶ亦可也。（トルストイは信仰とは人をして因りて以て生きしむるものなりといへり。）されどこの意味の宗教は、今の一派の人士によりてかの哲學、倫理、文藝等と同列に、之れを人性完成の一方面、乃至は趣味教養の一要素と見做さるゝ類ひの宗教とは、大いにその內容を異にせり。宗教は吾人の全人を最根柢より生き且つ動かしむる神祕力也。今人の多くが思惟する宗教は、心ずしも予の所謂宗教にあらざる也。

神子てふ自覺の中には、基督の所謂愛神愛人の大義も籠もりぬべく、ヘーゲルの、人格たれ、而して他の人格を敬せよ」てふ倫理上の最高原理も含まるべく、はた又本我實現の主義、生々化育の理想等をも包みて餘りあるべし。之れを演繹し、之れを應用しもてゆけば、多々益々辯じて、眞理源頭の活水、永しへに涸るゝことなき概あるにあらずや。

「神と偕に樂しみ、神と偕に働く」。これ神子の自覺よりおのづから達し得べき人生的一原理なり。一モットーなり。それ吾人は、世の初めより神に在りて一切の所有者也。こゝ未だ得ずして既に得、未だ見ずして既に見、常に貧しけれども常に富み、常に滿たざれども常に足らへり。花は散りつゝ且つ美くしう、月は虧けつゝ常に圓かなり。一塵も神に在りては永劫失せじ、生死彼岸の實相の春永しへに老いざれ

ば也。故に曰はく、神と偕に樂しむと。それ天地の神は、流るゝ水の生々活潑、一息の閒てもなく、働きて曾て休まず。吾等も亦神の子として、神を亮けて其の化育の大業に參すべきものにあらずや。何をか化育の大業とはいふ。一切衆生をして天人本來の關係の自覺に立還らしむる是れのみ。人をしてこの自覺に安立せしむる、世に是れほど崇高なる事業あるべしや。これを措きて復た眞の意味にていふ事業はあらじとこそ覺ゆれ。一切の社會的分科の事業は、達觀し來たれば、吾人をしてこの一自覺、一開悟に到らしむる第二義的事業のみ、若しくはこの自覺內容を豐富深邃ならしむる補助的要素のみ。世の所謂一切の事業に開眼するものはこの一個の自覺也。この自覺と伴はざる文明は、寧ろ無意義なる沙上の樓閣とやいはまし。故に曰はく、神と偕に働くと。事業以上の事業也、義務以上の義務也。

眞に神子の自覺に游泳せんものは、その一切の事、靈動無礙の概あるべく、而してこゝには又、世の自力他力といひ自愛他愛といひ、我無我といふが如き拘泥一味の言語は、春雪の消えて痕なかるべし。吾等鈍根、尙ほ遠きにこの境を望むものなりと雖も、今や未見の新天新地は開かれて、末だ曾て得ざりし自由と平安と光明と無所畏とを證し得たるぞ忝なき。乃ちこの喜びの音づれを天下の同胞と共に頒ち汲まんと欲する所以也。

（明治三十九年一月）

# 斷光錄

## 苦痛の祕義

苦痛の刹那、人は往々默して聖者となる。苦痛の前には、一切の煩惱薄きこと霧の如く、眼中の山河大地も幻の如くに漂ひ去らんとす。一念卽一切、一切卽一念は正さしくこの境の光景なり。この時吾人は往々一種清涼の感を覺ゆることあり。

大いなる苦痛の刹那、人に誇るべき何ものありや、恃むべき何ものありや、その好む所は何ぞ、その願ふ所は何ぞ、彼れは亡何をか戀ひ慕ひ、何をか思ひ煩ひ、何をか恐れ惑ひ何を



か蹉き惱むぞ。凡そありとある迷執薫染の源なるわれらが心の小壺の古徽は、一念清淨の水に跡なく洗ひ去られて、中に燃ゆるは唯だ沈痛嚴肅なる苦痛の餘のみ。苦痛の餘は畏るべし。而かもそは往々にして能く百煩惱の結縛を解く。苦痛三味は屢〻清涼三味なり。

苦痛は必ずしも恐れ詛ふべきものにあらず。苦痛は時に吾人を神に詣でしむる試煉の聖殿たり。嗚呼人生の行路に慘痛の涙あり、而かも吾人はこの涙に煉り淨められて屢〻赤子天眞の心に立還るを得るなり。是くの如きは實にこの不可思議なる神の世界の一祕義なり。これ浮泛語にあらず、われはわが病床に於いて曾て屢〻この祕義を味へり。

謂はゞ生命の柱を嚙み傷るともいひぬべき一種劇甚なる肉の苦痛に襲はるゝ刹那、われはわが人生に對する多少の希望、多少の計畫、多少の執著、多少の努力向上をば幾んど跡方もなく拋ち去るなり。かゝりけるをり、予は屢〻意氣地なくも死の手に一攫し去らるゝ如くに感じたるともあれど、又屢〻右に喪ひたるものを左に取り還すの喜びを得たり。何の謂ぞや。大死一番のうちに眞生命に觸れたる一味の悅び、是れなり。肉に死して靈に生きたるなり、路窮まりて海開け、人苦しみて神を仰ぐ。見よ、この刹那、苦痛てふ岩根こゞしき周りに、ひしと一筋に大慈の力に依り縋る優さしき歸依の眞清水、涌き出てて、いと溫かなる意にぞ之れを潤ほしたる。辿り深き信樂の士の苦痛の涙は、感謝の一念に輝きぬとぞ聞きし。

苦痛は人をして至誠ならしむ、眞面目ならしむ、我執我慢を脫せしむ。而して又時に神祕の靈力を直覺する大勇の道士たらしむ。語に曰はく、苦しい時の神頼みと。人、疾痛慘憺に會して未だ曾て天を呼ばずんばあらずと、古人も道ひぬ。これむしろ人情の至極なり。而して人情至極の煥發、これ實に神の最も近く在ましし給ふ宮居にあらずや。孔子の極めて實際氣質なるだに、尙ほその陳蔡の野に苦しむや、天てふ超自然力に我れの存在を結びて、以て自ら彊うし、自ら勵ましたり。苦痛に祕義あり。「我が神〳〵何ぞ我れを捨てたまふや」の基督の一語、嗚呼世にも是れほど深奥無量の苦痛の祕義あるべしや。この一語、唯だ〳〵われらが

一代の血涙を灑ぎつくして味ふべき也。語る能はず、說く能はず。

## 最も單純なる信念

「吾れは神の子也」。宗敎の極致、詮じ來たりて唯だこの一自覺、一信念を發揮するにあり。この一個の眞自覺を神に得て同胞に傳ふるは、何等の單純にして、偉大なる事業ぞ。世の事業といひ天職といふ、其の窮極の意義を達觀し來たれば、唯だこの一事に歸著す。一念この事に及ぶ、われらが枯槁の殘生、復た拋ち盡くして惜しむに足らざる也。

「愛神愛人」の敎義や、「神と偕に樂しみ神と偕に働く」の規箴や、其の他あらゆる問題の解釋の祕鑰は、皆藏められてこの一根本自覺の中にあり。卷けば方寸に藏れ、開けば六合に彌るもの、唯だこの一眞理乎。安心の法門もこゝに叩きぬべく、生存の要諦もこゝに尋ねつべし。唯だ世の之れを口に唱ふるもの、多くは未だ眞の自覺者ならず。

吾人の人格の趣味の內容は、及ぶべきだけ豐富なるべく、複雜なるべし。但だ之を約する主觀的信念の形式は、及ぶべきだけ單純且つ深奧ならんを要す。博學約信は敎養の一大要義也、而して「神之子」てふ一自覺は、最も能くこの約信の要求に副ふものにあらずや。

眞に「神の子」の自覺を有するもの二人以上集まる所、そこに眞の意味の社會あり、國家あり。之れを稱して「天國」といひ、「神之國」といふ。

## 自大自矜の一念を儆めよ

吾等をして自大自矜の一念を愼ましめよ。吾等にして若し絶對無上の眞理を攫めりとも、吾等は竟に是れ神にあらず、如來にあらず。基督だに曾て自己を神也とは宣したまはざりしにあらずや。吾等は竟に神にあらず、吾等は神の子也、神の大愛に連なる一分身也、一個識也。神人合一の刹那の境に於いてだに、吾等は全く神とはならず、唯だ一息閒てなき靈交の自覺に入れるのみ、我れは神の溫かなる懷に抱かれながら、依然として尙ほ我れたり。嗚呼こゝに吾等が永しへに居るべき眞地位はある也。而して權威と光榮と、亦實にこゝにあり。吾等をして漫りに自悟自覺の一念に思ひあがらしむる勿れ。吾等悟れりといへども尙ほ神にあらず、否悟りそのことが、神よりの恩寵なり。われは世の絶對の眞理を悟れりと稱する自覺者の態度に、歸依敬虔の一味なきをいと〳〵惜しとするもの也。



## われは谷閒の白百合花なり

われは谷閒の白百合花なり。謙の谷深ければ、虛榮の風に吹かるる虞れなく、操の匂ひ高ければ誘惑の波に搖らるる憂ひなし。人訪れねども、峯の松風、夜な〳〵の夢に通ひ、日影さゝねど、岩閒の清水、思ひの絃をまらべあふ。富貴の花と誇りて心の眞を戕ふとなく、文明の花と昌えて形の皓きを失はず。日を趁うて不斷に轉ずる雄心われには燃え

ねど、外を慕はぬ一念の鏡に、高き碧空の影も親しみ、人を魅するなよび姿の、われには、なけれど素き心の一すぢぞ、歸依信樂の誠なる。あはれ、われは大神の惠みの充ち足らへる小さき僕の、花の白百合なり。白きはたゞわが裝ひのうへのみかは、身も白く、魂も白く、夢も亦白し。白きは一切の色の源にして、衆德の流れいづる愛の徽號とぞ聞く。われ浮世の譽まれを求めねども、心醒めたる眞の友の感應おのづから寂びしからず。かくて夢ならぬわが世を夢と過ぎぬれば、見よいやはてのひと日、われは愛に輝く白妙の羽衣さして、光榮の天門高く打仰ぎつゝ、慕ひつゝ望みつゝ、彼方の故里へと歸りゆくなり。

## 自然

春は歌ひ、夏は働き、秋は考へ、冬は徹す。徹して而して歌ひ、歌うて而して働き、働きて而して考へ、考へて而して徹す。大河の水と流れ、梵音の響きと續きて、一氣貫穿、自彊ゑばらくも息まざるもの、是れ「自然」てふ大いなる靈魂の呼吸にあらずや。

歌ふや充實す、春潮洋々たり。働くや充實す、夏雲滃々たり。考ふるや充實す、秋の野に千里空明の觀念平かに、徹するや充實す、冬の空に涅槃實相の姿圓かなり。

自然の運行は歩々節々悉く充實して、一瞬やがて三世を渦まき盤る。「古池に蛙飛び込む水の音」は、聲々やがて久遠

に響き連らなる轉法輪にあらずや。鳶飛び、魚躍り、風吹き、水流る、自然の何物か、これ一氣の充實ならざる。充實は卽ち誠也、誠は卽ち天地の大悅也。

神を信ずるものは人を信じ、人を信ずるものは「自然」を信ず。かくて我等は熱き涙を頑石の面に灑ぎ、優さしき念ひを荒海の胸に抱くを得るなり。

## 後者に與みせむ

天地の閒の事、一つとして我が明瞭なる頭腦の光に照らしもて知り得ざるものなしといふやうなる態度いかめしげに、何事をも自家理性の俎上に載せて、心得顏の、事もなげに解釋し、說明し、批判し、斷定する自大聰明の學者あり。眼に一丁字なくして、事毎に驚異し、歡美し、崇拜して、敬虔の一念常に已みがたき無智迷信の野人あり。予れは情に於いて後者に與みせむ。

## 祈禱

或は曰く、瞑想は獨語也と、加へて曰はむ、獨語は祈禱也と。祈禱をして常にわれ知らず心の底より迸り出づる天眞の獨語たらしめよ、かくてそは如何ばかり美はしく、且つ力あるべき。かくはいへど、予は又かの一切の儀式的、器械的、職業的祈禱を排すと謂ひて、放心慢意、竟に祈禱の眞風光に參じ得ずして已むものあらんを悲しむ。形式の祈禱、時に吾人を導いて道交の奧龕に參ぜしむることあり。かの始め

は幾んど無意義、器械的に稱名念佛するものが、聲々次第に光明を帶び、精彩を著け來たりて、一念いつしか打成一片の信三昧地に躍入することあるの理を想ふべし。

無念無想の祈あり、言ひがたき歎きの祈あり、涙に餘る思慕の祈あり、一言の祈あり、千萬言の祈あり、奮鬪向上の祈あり、感謝平安の祈あり。すべて眞心より出づるものは皆祈也。

密室の祈もとよりよし、堂々たる天下の廣居に立つて、億兆民衆と偕に一心の誠を天地の大靈に聽こえまつるの祈に至りては、崇高のこゝろ極まれるかな。

## 『極數道德』の著者に



仙醉齋木君足下。曩には御書及び高著『極數道德』の一篇御惠贈に相成り、且つ之れに對する批評の辭を求めらる、僕に取りて甚だ光譽の事と存候。極數道德の名、既に奇聳、頗る人の心を惹く。乃ち披見一番。されど悲しいかな、僕の頭腦は此の書に含まれたる一乘無等の眞理を理解するの資格なきものにて候ひき。批評など思ひも寄らず。我れながら技癢さ、意氣地なさの極みに候へど、今は唯だ默して差控ふるの外無之候。眞個透徹の眼を以て此の書を評するもの、世にその人鮮からず候べし。冀くは彼等をしてこの書の眞價値、眞光明を發揮せしめよ。僕の如きは遺憾ながら明かに此の書に蹉ける門外漢にて候也。

足下が一切の敎權、祖師を排斥し去り、自家直接の意識の

實證を以て、徑ちに眞理の堂奥に參ぜんとせらるゝ浩々の意氣抱負は、頗る僕の心を得たるものに候。眞理を慕ひ求むるものは、何人もこの意味に於いて個人主義者たらざるべからずと存候。個人直接の判斷と證得とを外にして、眞理に參するの道はあるまじく候。但だ足下がかゝる一種の抱負と用意とを以て證得したまへる極數道德の眞理の內容を僕の十分に領會し得ざるは、遺憾千萬に候也。僕深く之れを恥づ。

尙ほ僕をして一言を添へしめよ。極數道德に如何なる無上眞理の含まれ居り候にもせよ、數理といふが如き抽象的、知力的のものが、果たして吾人の全要求を滿足せしめ得べきものに候べしや。或は足下の謂ふ數は、かのピュタゴラス派が其の所謂數を一面實體的に解し、若しは易哲學が數其者の關係以外に「生々存々」の一元氣を置きたるやうの觀法と似通へるもの、乃至は儒敎やストアの誠といひ道といふものと略〻同位置を有するものに候や。若し實に然りとするも、かゝる豐富なる具象的、實在的意義を有するものを數理の關係てふ如きものにて、遺憾なく標現し得べしや否やといふこと、是れそも〳〵重要なる一疑問なるべく候。伊藤仁齋は、宋儒の所謂理を評して、氣中の條理のみと喝破致し候ひしが、此の評の當否は姑らく措き、兎に角、數理上の關係に含まるゝ眞理は、如何に深遠精微底のものに候にせよ、其は到底或具體的活物中の一關係、一屬性、一條理たるを免れずとこそ存候へ。數そのものには衝動性なく、活動性

なし。我等は數理に向つて涙をそゝぐ能はず、祈る能はず、自家中心の要求を訴へいづる能はず候。少なくとも僕の要むるものは、數理その者にあらずして、數理の章を具へて活動する靈的活物にて候也。（されど是れは勿論貴著に對する批評にては無之候。）

神子の自覺神國の實現、この三つのものを外にして、究竟するに天人に通じ、三世を貫く常恆不易の眞理はあらずとこそ存候へ。而してこの眞理を最も沈痛深切に證得せるもの、古今、耶蘇基督を推し候べし。基督を自覺の最長兄とせる天國の實現は、我等が此の世に於ける最嚴肅の義務には候はじ乎。

貴著の批評に蹉きて、はからずも僕みづからの信念の陳述と相成申候。事の禮なきをも咎めたまはで御敎示に接するを得候はば、幸甚に候也。不盡。

（明治三十九年二月）

## 「神子」の辯

「神之子」の一語、やゝ打惑はるゝふしなきにあらず。わが所謂「神之子」の語はキリスト卽ち救主の意義を帶ばせたるにもあらず、又神の生みたまへる獨子てふ意義を含ませたるにもあらず、況して神其のものといふ意義をや。皆非也。わが所謂神之子の語は、唯だわが見神及び神人道交の實驗上、おのづから得來たれる父子有親てふ一種微妙なる靈的關係を詮表したる語に外ならざるなり。わが所謂神子の

意義、之れより多からず、又少なからず。茲にはこの一意義を外にして、復た何等の歴史的、傳説的意義をも有せざるなり。思ふに、かゝる意味に於いての神之子(如來之子)てふ一語ほど、世にも最も適切深奥に天人の關係、隨うて吾等人類の眞地位を指示確立する語(ことば)はあらじ。吾等一切衆生は、最も正當なる意味に於いて、本來皆ひとしく神の子たるにあらずや。我等衆生をして、この光輝ある一自覺に立還らしむるが、取りも直さず神の大慈の本願にあらずや。「神子」の一語、これ決して自大の語にあらず、冒瀆の聲にあらず。直觀の語也、靈覺の聲也、而して又公明平正の事實也。吾等人類は、本來皆この自覺に入るべき權能あるなり、入るべき筈也。一たび天父の大愛に觸れたるものは、明かにか朧ろげにか、皆神子の自覺に入るものといふべく、若し世に神を我が父と呼びながら、心誠に神子の自覺を有せざるものあらば、そは疑ふらくは僞善の徒乎。個の神子の自覺、豈基督の獨占ならんや、彼れは唯だ最も沈痛深刻にこの靈覺に游泳自在せる人中尊也、摸範人也、最長兄也、最大代表者也。

神之子てふ自覺は吾等人類の自然の衷情より流れ出づる聲なり。吾等若し眞實に神子の自覺に入ることを得んか、之れを言語文字の形式に詮表すとも、せずとも、將た之れを詮表するの言葉が「神之子」なるも、「人之子」なるも、是れそもそも何の關する所ぞ。自覺そのものの中心内容を餘所(よそ)にして、拘々として文字言語の形式を詮義だてするは達觀者の事にあらず。基督は常に自ら謙して「神の子」てふ言葉を

用ひしこと稀れなりといふ乎、而かも彼れは、一面堂々として憚る所なく自己がアバラハムの在らざりし世の始めより神の懷に抱かれたる獨子にして而かも世を救はんが爲めに特に神より遣はされたりてふ自覺を隨處宣傳したりしにあらずや、されば、眞に基督を觀んとするものは、直ちに彼れが自悟自覺の中心內容に分け入るを要す、彼れが個々の言語の跡に拘泥するは斷じて非也。

たゞわが所謂神の子の意義は、上に陳べたる如し。讀者乞ふ、わが神子の一語に躓くこと勿れ。

## ○負けじ魂

人として大志大望なきはあらず、あるべき筈也、あらざるべからざる也　スピノーザは、大望心の定義を下だして、權力に對する異常の欲望也と曰ひ、更に之れを說明して曰はく「大望心は一切の感情が依りて以て培はれ且つ牢うせらるゝ欲望也、かるが故にこの情は極めて制しがたきものなり。その故、人は何等かの欲望に結縛せらるゝ限りは、同時に又必然に、この情に結縛せらるればなり。シセロ曰はずや、上士は殊に名聞に誘導せらる。哲學者だに名聞を難ずるの書を物して、尙ほ之れに彼等の名を署するにあらずやと」。說き得てよし。人誰れか大志大望なからん、人苟も世に出でて何等かの欲望を有する限りは、この欲望の滿足を求めて、それ〳〵の聲譽圈內に第一流の位置に立たんとを冀はざるは無かるべく、是くの如きは、古希臘人の見て以て

誇るべき一美德と做せるもの也。如是大望心はやがて謂ふ所の負けじ魂なり。思ふに、個人と社會と、その雄大なる負けじ魂を振り起こして始めて向上あり、發展あり。社會と人生、觀じ來たれば、個人おの〳〵の負けじ魂の調和也、平均也、歷し合ひなり。森の木枝の張りつ、壓しつ、おのがじゝなる負けじ魂の、姿勇ましう蒼空高く打揃うて喘ぎ上るを見ずや。但だ眞個の負けじ魂は、人を對手の負けじ魂に非ずして、神を對手の負けじ魂ならざるべからず。人を對手の負けじ魂は、動もすれば克伐となり、競爭となり、猜忌となり、躁進となり、勝心慢氣となり、自足病となり、名聞餓鬼となる。神を對手の負けじ魂は、然らず、不斷に無限の向上ありて、而かも謙々の心まばらくも退かず、敗れて感謝の聲を絕たず、勝つていよ〳〵勵みいそしむの緣まげし。スピノーザ亦、唯だ理性に基づく名譽心、自尊心をのみ眞の德とは見做したり(彼れは眞理は人の名を帶ぶべきものにあらずと唱へて、其の大著『エーティカ』の出版を匿名にせんことを其の友に囑したりき)。人に勝たんの負けじ魂は、碌々たる小丈夫の小望也、神に劣らじの負けじ魂は、浩々たる大丈夫の大望也、所謂直を以て養うて天地の間に塞がるもの也。かの森の萬木の、互ひに競ひて目指す所、蓋々として直ちに天日の耀く所にあるにあらずや。

## 不斷の神在

われわが衷に大いなるもの在しますと感ず。我が思ふ

事、語る事、爲す事の一切を通じて隱約として動く者あり。われ之れを見ざる能はず、感ぜざる能はず、觸れざる能はず嗚呼我等人の子は餘りに習性の我れに縛られたり、餘りに我れの果敢なさ、甲斐なさ、つまらなさに思ひ慣れたり。而して日夕役々たる常途の生活に埋もれ果てて、徒に神なきを嘲ち、人生の杯の苦きを打囁くなり。起てよ、起つて勇猛無限の心を皷して、十重二十重に縛られたる「凡習を斷除し」、而して爾が清新なる直覺の眼を瞠開し來たれよ。希有なるかな、この時、吾人の「我」は、最早曩の生命の光りなき日常凡習の「我」にあらずして、久遠劫來の神祕の大潮音に濡れひたりたる一種堂々たる超現實の「我」となれるにあらずや。我はこれ光榮ある天國の鍵を握れる家督相續人にあらずや。

（『法華經』の長者窮子の譬をよく思ふべし）。こゝに吾人は「我」ならぬ「我」、「自然の超自然」てふ尊嚴無上の自覺に撞著して「我れ父に居り、父我れに居る」靈交一味の消息に入りぬるなり。げにやこの境、語らば白露の珠とも消ぬべき妙にいみじきこゝろかな。あゝ深いかな基督の自覺。われは今にして基督が「父の外に子を知るものなく、子の外に父を知るものなし」といひ「我れ父に居り、父我れに居る」といへりし悠々たる不思議甚深の法音の一角に相參するを得たり。我れは衷に不斷の神在を感ず、而して之れを證するものは基督也。

「誰人の孤衣てゐます花の春」

狗子にも佛性ありとぞいふ。われ不思議なる法緣を得て、一たび神子の自覺に入りてよりは、何物を見ても假りそめならぬ本來の權威と光明と、躍々と我れを撲ち來たるものあるを切に感ずるやうになりぬ。曾ては人閒の竹頭木屑なんどのやうに思ひ下だしたりし乞兒の群を見ても、誰人の菰衣てゐます花の春の、一種犯すべからざる本來の美くしさと貴さとに、わが頭おのづから下りぬ。あはれ、かくてぞ旅は道づれ世は情け、一切の有情と無情と、皆一つの貴き靈界の枝と連なり、葉と茂りて、偕に敬し、偕に愛し、偕に助け、偕に働く。誰れかいふ人生空なりと。

## 人と石

路傍の頑石、もし一朝人語を發して、妙辭を吐囑し、法音を流宣することあらば、吾人は愕然としてそこなる靈異の神にぬかづくべし。こゝに人の形したるものありて、語り、歌ひ、考へ、驚く、而して吾等はこれを平常當然の事象と見做して曾て驚異せず、嗟歎せず、況んやそこに靈異の神の現前して不斷の法輪を轉じつゝあるの一事に想ひ到るが如きとをや。むしろ大怪事と謂はざるべけんや。石の形したるもの語り且つ考ふれば、驚き異しみ、而して人の形したるもの語り且つ考ふれば、驚き異しまず。其の理由を問へば、唯だ石は默し人は語るてふ後天經驗の事象に見慣れ聽き慣れて、敢て之れを不思議とせざる吾人習性の然らしむる所といふの外はあらず。甚だしいかな、習性の人心を梗塞し、

壅閉することや。夫れ神の前には、人、石となり、石、人となる。神は能く石をして叫ばしめ、人をして默せしむ。心靈の事實は一如洋々として當處に充ち盈てり。我等如何なれば、人の形したるものの語り且つ考ふるの事象に執して、石の形したるものの語り且つ考ふるの合理に見到らざる、如何なれば又、石の形したるものの語り且つ考ふるの合理に驚異見神して、人の形したるものの語り且つ考ふる事象に驚異見神せざる。古人曰はずや、「君子は理を見て形に局せず」と。彼れ驚異すべくば此れ亦驚異すべく、此れ合理ならば彼れ亦合理也。かるが故に達者は能く石女の舞ふを見、能く木人の歌ふを聽く。



## 先後本末

ダ弁デは曰はく、「われむかし年若くして今老いたれど、義者のすてられ、或はその裔の糧乞ひありくを見しことなし」と。基督は曰はく、「爾曹何を食ひ何を飲み何を衣んとて思ひ煩ふこと勿れ、爾曹まづ神の國と其の義とを求めよ、然らば此等のものは皆爾曹に加へらるべし」と。孔子は曰はく「學ぶや祿其の中にあり」と。法然上人は以爲へらく、「念佛は本にして衣食住は助業也」と。二宮尊德は曰はく、「若し能く一人の心田を開拓することを得ば、百萬町の荒地も亦憂ふるに足らず」と。古聖賢の言、炳として符節を合はせたるが如し。常に怡然として色樂める或肯按摩の曾て予に語り

けらく、「私は年壯き屈强な體をした漢が、人の門前に立ちて物貰ひするを見るごとに、一度もふびんと思つた事はありません、人間は正直に働きさへすれば、今日樣が決して棄てはなさりませぬ」と。一文不通の彼れ亦、この古今一貫の眞理を色讀して、毅然として曾て惑はず、疑はざるなり。

古人或は「衣食足りて禮節を知る」といひ、或は又「恆產ありて恆心あり」などともいへり。是れ衣食の充實が道德の先行條件なるを道破せる一面の眞理なり。この眞理を高唱する者は以爲へらく、先づ麵麭を與へよ、而して後道德を與へよ、生存の安固の擔保なき所、人焉んぞ仁義道德の器たるを得んや。人皆、曲肱水を飲んで名敎の樂みを渝へざる孔子顏淵の徒にあらず、窮して濫するは古今の通情なり。かるが故に恆の產なくして恆の心なきを讓むるは誤れりと。吾人は心なくこの一面の眞理を排し去るに忍びず、物と靈と、食と道と、相依り相濟うて、いづれをか重しとし、いづれをか輕しとせん。されど吾人は尙ほ一家の所信に從うて以爲へらく、謂ふ所恆產を得るその事が、既に道德的條件に須つ所あり、正直に自家の額に汗せずしては一片の食をだに得る能はざるが自然の大法にあらずや。窮して濫するはいかにも悲しむべき人心の脆弱なれど、人をしてこの窮境に立到らしむるもの、やがてその恆心なきの致す所と見るが多くの事實ならざる乎。人、至誠なくして、一片の瓦をも積むと能はず、一穗の粟をも斂むること能はず。爾が全良心を爾が事業に運用せよ、衣食問題の解決おのづから其處

に存せん。孔子は曰はく、「君子は道を謀りて食を謀らず」と。之れを以て單に道學者流不通の語となすこと勿れ、陳くして新しき眞理こゝに在り。

衣食の一念に煩はさるゝものは未だ悠々たる天地の大愛に生くるの幸福を味ひ得ざるものといふべき也。

## 融會力、妙法力

自力乎、他力乎、寧ろ之れを合して融會力といふべく、妙法力といふべし。石、塊然として横はる、之れを斥して純他力の發現といふべき乎、あらず、止まるを知つて止まるは、石みづからの本具なり、不靈の頑石尚ほ且つ神の威力を以てして、褫ふ能はざる一味自力のこゝろを含めり。水は神と共に流れ、花は神と共に開く。一切の物、何れか自他融會の妙法力の發現ならざる。夫れ神は萬有を造りて、之れを縛せず、錮せず、之れをして無限におのがじゝなる個性を展べ啓かしむ。「それ〴〵の朧ろのなりや梅柳」。一切に個性あり、個性のある所、自力のある所、而して自力のある所、やがて又他力のある所也。自由と法則と、自力と他力と、この二大樂音の相融會して、妙法のまらべ高く脉うつもの、やがて自然界の大景にあらずや。見よ、一水縱まゝにおのが姿をくねり流れて而かも大野の景色おのづから整ひ、一鳥高く自由の翼を搏つて、而かも美くしき輪形の道、おのづから碧落の鏡に泛かべり。自ら歌うて神の調べと合し、自ら行うて神の則を迦る。此くの如きは惟り藝術的神祿の場合に於け

る事實なるのみならず、一切普通の事實なり。融會力といふべく、妙法力といふべし。

## 眞人と神

スピノーザは曾て「人に最も有用なるものは人なり」といへりしが、われは曰はく、人を救ふものは人也と。蓋し以爲へらく、人のうちの眞の人は神也、吾人が神を慕ふの心はやがて眞の人を慕ふの心也。眞人唯だ吾人を救ふ唯一の生命也、神也。眞人以下の神に跪けば迷信に墮ち、眞人以上の神を仰げば空蕩に入る。吾人至深の要求は、法身佛(眞如、絶對)を引き下げて報身佛に具體結象せしめ、應身佛(現身の釋迦、基督)を引き上げて報身佛と醇化神化せてはじまず。報身佛は卽ち眞人也。眞人は卽ち神也。

(明治三十九年三月)

# 眞理と人格の趣味

眞理の人に及ぼす感化勢力は、眞理その者よりも、寧ろ眞理詮表の形式、姿態に存すること多し。眞理若し磧の石塊の如く、赤裸々にして人生に散在するものならば、その人生と交渉する所、いと〳〵尠なかるべき也。それたゞ人の、是くの如き赤裸々の眞理を拾ひ來たりて、これに自家特殊の姿態ある表現を與ふるあり、是に於てか眞理は一種の潤澤を帶び、光彩を著けて、強く深く人生と觸著す。眞理そのものは多くの場合に於いて幾んど死物也、これをして血あり生命あり言葉あらしむるものは人也。眞理は人に有せられて始めて力あり。人を動かす眞理の底には常に人あり。





福德一致の眞理は、古希臘人の常識の概ね通有せる所、また かもそが長く人類思想史上の一光彩となれるは、畢竟ソークラテースが自家人格の實證に基づきたる特殊の詮表をこれに與へたるが故にあらずや。或は知德一致といひ、知行合一といふ、此等はた未だ必ずしも珍らしき眞理なりとは見るべからず、唯だソークラテースまたは王陽明などいふ偉人の出でて、之れに特殊の詮表形式を與ふるあるに及びて、そは則ち千載の確論たり。眞理は重んずべし、されど眞理が如何なる形、如何なる姿態に言ひ表されたるかを見るは、更に一段の關心事なりといふべし。人を動かすの力は、眞理そのものよりも眞理詮表の形式如何に係ること、いと いと多ければ也。

何を斥してか眞理詮表の姿態といひ、形式とはいふ。曰はく、人格の趣味、是れのみ。譬へば眞理は果實の核の如く、之れが詮表形式たる人格の趣味は、核を包被してこれに甘き生命の潤ひあらしむる肉皮の如き乎。されば眞理詮表の形式とはいふものから、そはやがて眞理に活力あらしむる內容そのものに外ならざるなり。眞理てふ抽象普遍の內容を包むに、人格の趣味てふ具象特殊の詮表形式を以て、して、其は始めて力あり、光輝ある全備の眞理たるなり。彼れも此れも同じ眞理を詮表せるものにてありながら、尙ほ其の人を動かすに、一家大なるあり、一國大なるあり、全世界大なるあり、或は又泯然無聞に歸するもありて、其の品彙の萬殊相同じからざる所以は、主として其の眞理詮表の形式たる人格の趣味の、人さまゝなる差別に歸著すべし。

「己れの欲せざる所之れを人に施す勿れ」といひ、若しは、「己れ人に爲られんと欲ふとは、人にもその如くせよ」といふ如き所謂忠恕の眞理は、必ずしも孔子及び基督の二聖の創唱とのみ見るべからず、これと同樣の眞理を言ひ表はしたる一種の格言は、希臘、希伯來の古文書にも之れ有り、基督と殆ど並世にして出てたる猶太の賢者ヒルレルは「爾の惡む所は之れを人に施すと勿れ」といふ誡めは、法律の總和なりと道破せりと傳へられ、『トビアス』書には「爾自らの不快とする所は之れを他人に施すと勿れ」とあり、又『無字法門經』には「己れの欲せざる所を他に勸めざれ」との一戒律を以て菩薩の恪守すべきものと明言せるにあらずや。此等皆等し

く同一眞理を略〻同じ形に詮表せるものにてありながら、而かも尙ほ孔子が一代の心法たる忠恕の道と、基督が相愛の大義を詮表せる金則とのみ、惟り偉大なる感化勢力を世界の人類に及ぼして無窮に奕々たるは何が故ぞ。天地を父母とし、人類を同胞とするの思想、及び之れに近き思想は、『墨子』の一書にも見るべく、張子の『西銘』にも見るべく、『法華經』其の他の佛典の中にも見るべく、將た又我が德川時代の一派の儒者の思想にも見るべし。而かも竟に惟り耶蘇基督をして幾んどこの思想の專有者たるの觀あらしむるは何が故ぞ。啻だに宗敎上、道德上の眞理のみにあらず、自然科學上の眞理といふとも、亦復た人格の趣味と相結びて詮表せらるゝに及びて、そは始めて特殊の光彩を發するを見る也。重力の眞理は、それみづからにて偉大なる科學上の眞理なれど、若し之れを、其の搊唱者たるニュートンの敬虔にして謹嚴なる人格、及び其の詩的直觀とも謂ひつべき一種特殊の逸事等より全く抽離し去らば、其はおのづから幾分の光彩を薄うするの感あるべし。されば一切の人生的眞理は、吾人が撫摩體察、沈浸涵泳の餘り、之れを一種の趣味として詮表するに及びて倍〻大いなる活力を有し來たるものといふべし。是くの如き眞理にして、始めて能く自ら燭らすと共に、又能く他を燭らすべし。畢竟、是くの如き眞理は、人格の趣味てふ一種の圓光もて輝ける眞理なり、其が人を引著する一種不可言の祕力の源は、こゝに見るべきなり。されば吾人が是くの如き眞理に動かさるゝは、詰ま

るところ、主として人格の趣味其のもの(委しくは人格の趣味としての詮表其のもの)に動かさるゝなり。人格の趣味たらざる人格の趣味として詮表せられざる眞理は、力なき眞理也、空名の眞理也。

予輩が『福翁百話』に心折措かざる點ありとせば、そは其の包含せる眞理そのものの上にあるよりも、寧ろ其の眞理詮表の姿態が福翁てふ特殊なる偉人格の趣味と相渾融して、『福翁百話』是れ福翁なる乎、福翁是れ『福翁百話』なる乎の概ある所にあり。福翁その人を離れて『福翁百話』はあらず。『福翁百話』の眞理は、毫も外より貼付せられ糊塗せられたる痕を著けず、直ちに福翁の人格そのものより生ひ出て茂り榮えたるの觀あるなり。福翁一代の心の味ひを言ひあらはしたるものゝやがて『福翁百話』の眞理也。こゝには、人と眞理と合して一たり。されば此の書の一句一節を斷ち離して見るも、尙ほ福翁の意氣聲容、颯として人に迫り來たるものあるにあらずや。直截にいへば、『福翁百話』の眞理は餘りに常識的なり、平凡なり、俗智的なり、而かも尙ほそが煙波限りなきの趣きを具へて人を引著する力あるは畢竟其が福翁てふ特殊の人格を通して特殊の詮表を得たるが故にあらずや。そこには游泳あり、體達あり、自得あり、支配あり。『福翁百話』一篇、要するに是れ福翁人格の趣味の詮表にあらずや、結晶にあらずや。是くの如くにして平凡なる眞理も光彩を著け、舊き眞理も新らしき力を贏得す。文章運用の能事こゝに見るべく、眞理詮表の要訣畢竟亦こ

とにある乎。

（明治三十九年三月）



# 純他力觀についての復書

未見の法兄、某君足下。曩には小著『病閒錄』に對する御批評を辱うし、今又御懇書に接し、御芳情千萬奉鳴謝候。殊に自力他力の信仰に關して、段々の御敎示を蒙り、尠なからず觀省の資を得候段、ありがたく御禮申上候。自他の信仰を打披きて、與に偕に向上の路を辿り候はんは、如何ばかり美はしき事に候ぞ。尙ほ法界の同行者として、今後とても御敎示願上げたく候。御來諭に曰はく。

基敎が說く他力觀に比して予が奉ぜる眞宗の純他力は一層進步せる者か宗敎の骨子は服從に盡き候絕對の服從の前には自己を見ず候神の無限力の外に自己の微力だも實現不仕候信仰以前には自己を見て居り候へども神人合一卽ち機法一體の南無阿彌陀佛の前に

は自己を見ず候戰地て自己を顧みず只命令に從ふ味卽ち宗敎の眞髓かと存候神の無限の輪の外に自己の有限が存するとは奇怪に候はずや私は奮鬪活動向上皆これ神佛の賜物と信じ少しも自己の自由意志とは心得ず候云々

右御說に對し、敢て御答へとは申さず、一つ二つ卑見開陳仕るべく候。一言いたし候へば、小生も他力信者にて候。但だ小生は目下別して神子の自覺に無限の法悅を感じ居り候ものに候。神と人、卽ち父と子との感應道交を外にして、所詮宗敎の要諦はあるまじくとこそ存候へ。神若し神自らの外に何物をも要し給はぬ本意ならば、子としての我等を造り給ふ筈あるまじく、既に之れを造り給ひしうへは、我等が個性、個人格の存在を認め許し給ふべき筈に候はずや。神は孤獨を欲し給はず、神は我等との愛の交りを要め給ふが故に、我等に個人格としての存在權を賦與し給へるにて候。而して既に個人格と申候へば、そこに一種の自由、自力の含まれ居候と、これはた當然かと存候。我等を器械木偶となし給ふは神の本意にあるまじく候。我等が神に對する愛は自由の愛ならざるべからず、自覺の愛ならざるべからずと存候。

絕對的服從と宣ふ乎。小生はむしろ信ず、絕對的に神意に服從するそのことが、我等が自由自力の權能にはあらざる乎、こゝに我等が大いなる新人の旺盛なる實現はあらざる乎と。

されば小生の所謂他力は、一味の自力を包み容れたる他力にして、打つけに之れを排し去りたる他力にては無之候。

些の自力の意識を容れざる他力は、餘りに空蕩々にして無内容に過ぐ。神の大愛は、我等が個人格に根ざせる自由の努力を撥無し、蔑視し、拒斥し給ふほど、おかく褊狹なる荒涼なるはた無慈悲なるものにてはなはずと信じ候。勿論これは理窟上の沙汰にあらずして、神人道交の實驗より來たれる味ひのうへの語に候也。

我等の新人が、神意に合致して働くその働き、取りも直さず神の純他力の發現と宣ふ乎。小生はむしろこれを神人父子の融會力と申したく候。げにや神人合一の刹那、我は大光攝護の懷に沒入して、而かも尙ほ頑たる空無に歸せざる「父我れに居り、我れ父に居る」てふこの相卽微妙の一種不盡の味ひは、單に純他力の發現とのみにては、說きつくしがたきものあつて存するにあらずや。

こゝに抹すべからざる一味自力のこゝろあり。神は我等を全く無相の海に呑みつくしたまはず、我等に子たる一味の自力を許し給ひて、その合同協力をさへ要め給ふ。是くの如きは必ずしも神に對して我を立する冒瀆不敬の語にあらず。寧ろかく信じてこそ、神の愛は一層深く且つ豐富に味ひ得べしとこそ存候へ。

小生は又この點に於いて、かのストア學派が一面博大なる凡神觀的根柢に立脚しながら、尙ほ吾人が絕對的に天地の大法に服從する向上奮進の努力そのものに一種の自由力あるとを認許せんとしたりし一點に(其の哲學組織の統一如何は論外として)尠なからぬ同情を寄するものに候。

按ずるに、眞宗の純他力觀は、佛敎通有の凡神論的根柢より來たれる必然の結論、卽ち吾人の個人性、個人格、隨うてこれに含まるゝ一味の自由自力の自覺を餘りに輕視せるものには候はじ乎。一言に掩へば、個人格てふ觀念の缺亡、若しくは少くとも貧少といふこと、これ眞宗延いては佛敎全體の重大なる一弊には候はじ乎。

所詮、吾人の一切の活動が、神子若しくは愛神の深き一信念より浩然沛然としておのづから涌き出づる底のものとなり候を得ば、宗敎の第一義こゝに盡くべく候。而して若しこゝに自力他力の辯を加ふるの要ありといたさば、小生はむしろ二者の抱合、卽ち融會力、又は絕對力の一語を以て答ふべく候。これ少なくとも小生目下の實驗の味ひにて候也。（理論上より申候へば、神力卽ち純他力の外に人力自力といふものの存在する餘地なきが如くに候へど、實驗上吾人の個人格に根ざせる自力感を全く排し去りたる純他力は、餘りに荒涼には候はずや。小生の他力は自力の內容に色づけられたる他力卽ち融會力にて候也。）

小生は自家の信念を他に强ふるを好まず、以上は唯だ御來諭に因みて所信の一二を披陳いたしたるまでに候。素より機根相應の語、御敎示を仰ぎたくと存候。尙ほ純他力と罪惡との關係につきても敎を乞ひたきふし候へど、今は差控へ申候。基佛兩敎優劣論の如きも、まばらく御預りといたし置き候。不盡。

（明治三十九年三月）

# 法悅のこゝろを想ふ

「吾人の救濟、祝福、自由は、神に對する常恒にして永劫なる愛、又は神の、人に對する愛に存す。この愛もしくは祝福をば『聖經』にて光榮と呼べり、而して是れ不當の稱にはあらず、何となれば、是くの如き愛は、正當に精神上の安心と謂ふべきものにして、實に光榮と別つべからざるものなれば也。」

「法悅(祝福、欣悅)は德の報にあらず、德其のもの也。」

スピノーザ『エーティカ』第五編

「明月は座頭の妻の泣く夜かな」。一誦して涙下らしむ。げに逢ひがたき清光の一夜に負きて、空しく蕭條の膝を抱く盲目者は、世にも不幸の人なるべし。さはれ世の盲目者ならざるもの、果たして盲目者よりも幸福の人なる乎。盲目者ならざるものも、屢〻天上清光の虧け易きを恨み唧つにあらずや。目なきもの、もとより悲しむべく、目あるものも亦未だ喜ぶに足らず、いづれは同じ破れ易き色身の歎きを載せて、うつろひ易き幸福の花を逝波の上に追ふ人の世の慣ひなり。嗚呼世に眞幸福はなき乎、目なきものをして凋まぬ心の華を觀ぜしめ、目あるものをして常住眞如の月の姿を打仰がしむるものは何ぞや。

春色の惠然として來たるや、草の萌え鳥の囀る、いづれか皆おのづからなる喜びの、天地の心胸より溢れに溢るゝ相ならざる。嗚呼われらが習慣の縛を釋き、道德の羈を綏うし、念々機微の隈〻までをも、大いなる一つ惠みのこゝろに潤し育む靈光普曜の春色は、いづこよりか來たるべき。

人若し日夜、衷に鬪ふ幾多先入の見を去つて、何思ふことなき天眞の心の鏡に、この天地の森羅を浮かべ出でんか、何物のおはしますかは知らねども、忝けなさに涙こぼるゝ融融の感、時に抑へ敢へざるものあるべし。成心と雜慮との無き處、やがて常に一種敬畏の情の宿る所なり。この敬畏の念卽ち一種の朧ろげなる宗敎的衝動といふべきものも、後ちに吾人が自覺的に吾人自己の存在を超自然なる天地の實在と結合せしむるに至りては、極めて光輝ある念々相續の宗敎的情調となつて存するに至るべし。この場合に於いては、この一種の宗敎的情調、卽ち吾人に取りての唯一の眞生命也、眞幸福也。之れを稱して法悅とはいふ。

悠々たるかな法悅の味ひ。ありがたし、かたじけなし、うれし、たふとし、神〻しなどいふすべてこの一類の歸命、信樂、荷恩、感謝、讃美、敬虔、崇嚴の諸念、相結び錯はりて(たとひ此等諸念が常に明瞭に意識せられずとも)、一種神祕の情調、不斷にわれらが靈魂の火皿に燃ゆる、これ豈法悅にあらずや。法悅の光は淡くして勁し、其の火根直ちに天地の大生命と通ずれば也。何等かの或超自然的神祕力と結合することなくして、法悅はあらず。神祕力の充溢する所、やがて、法悅の涌き出づる所也。所謂神祕力の根柢は、神なる乎、佛なる乎、眞如法性なる乎、南無妙法なる乎、南無阿彌陀佛なる乎、此等信仰の客觀的對象の穿鑿は寧ろ第二義に屬す、眞に宗敎に重んずべきは、法悅もしくはこの類の言葉をもて詮表し得べき一種の主觀的充實の心狀態にあり。信仰の眞に信

仰と謂ひ得べき意義は法悅にあり、吾人をして眞に信仰に生きしむるものは法悅也。未だ法悅を得ずして眞に得道見性せるものはあらず、吾人に不斷の法悅なきは、是れ未だ眞に信仰の機に參ぜざるの證なりといふべし。法悅は理解の人に來たらずして色讀の人に來たる。法悅は安心也、解脫也、所有也、力也、全人格の實證果也。是くの如き人にありては、神は外にあらず、法悅卽ち神也。如來は外にあらず、法悅卽ち如來也。法悅卽ち南無妙法蓮華經也。法悅卽ち南無阿彌陀佛也。たとひ百千萬卷の經卷を打誦んずとも、法悅なくんば何かせん、たとひ日に百億萬遍の佛名を唱ふとも、法悅なくんば何かせん、たとひ主よ〳〵と呼びて讃美祈禱の聲を絕たずとも、法悅なくんば何かせん、たとひ金口鐸舌、勢ひ猛に敎壇に道を說くとも、法悅なくんば何かせん。すべて空の空也、我等に若し不拔の信念あらば、法悅の心華おのづから內に綻び、さて發しては百千萬言の祈禱となり、稱名となり、感謝となり、讀經となり、說法となり、化他報恩の一念抑ふれども抑へあへざる者あるに至るべし、是くの如きをこそ、眞個、見性底、見神底の人とはいふべけれ、傳へいふ、昔し善導大師の稱名するや、聲々悉く一道の光明を放ちきと。衷なる法悅の、おのづから外に流露しければなるべし。

法悅は人をして屢〻狂熱の人たらしむ、されど狂熱の人すべて法悅の人也とはいふべからず。由來吾人の感情と深大なる關係を有する宗敎の事にありては、感情の一時の發作、興奮、激動、感染、沈退、萎縮などいふ病的變態を生じ易き

は古今史乘の證する所、かの信仰復活に往々伴生する病的現象の如き、正さしく其の一例也。人は皆、謂はゞ被催眠者の如くに一種緊張せる感情的空氣の感染を受けて、其が中に漂ひ、溺れ、泳ぎ、躁ぐ。而して一旦理性の眼の醒め來たるや、嗒然として我れ我れを失ひ、奇しみ、笑ひ、嘲る。曩に感情の九天に上れるもの、今は忽然として感情の九地に下りぬ、而して顧みれば、寂寞空虛の暗影は、前よりも、更に暗く黑くわが心情の奥に巢ごもれるにあらずや。思ふに、謂ふ所法悅も亦、時にかゝる一時的感情の發作を伴ふとあるべし。されどそは寧ろ偶發の現象にして、必然の關係ありて然るにあらず。否、かゝる發作は法悅の累ひとこそはなるべけれ、之れを滋長涵養する所以にはあらざる也。法悅は感情の一時の發作にあらず、耽溺にあらず、躁狂にあらず。眞個の法悅より發動し來たる宗教的熱情は、其の根柢、天地と共に牢うして、一種恆久の力を蓄ふ。かの一時的發作に、狂喜我れを忘れて、忽ち復た故の空虛の蛇に咬まるゝ如き宗教的感情をば、浮薄なる藁火狐火の類ひに譬ふべくば、法悅は寧ろ寂然としておのづから照らす剛明の火也、沈々として深きに息する「金剛の焰」也。

勿論法悅にも亦時に自然の漲落なきを得ざるべし、而かもそは到底吾人の全人格の實證に華さくものなるが故に、その根柢に一道不拔の要素あり。かるが故に一たび得たる法悅は復た失墜するとあらじ、否、失墜するものは以て法悅と稱すべからざる也。（是くの如き法悅を自得する迄に

は、何人か、幾番の歡喜、幾番の失望、幾番の光明、幾番の蹉躓を經驗せざる)。げにや煩惱具足の我等は、屢〻人生の行路に躓づき仆るゝとありぬべく、而かもかゝる折にだに、尙ほ一種言ひがたき歡喜愛樂の念は、雨夜の月の、いづこともなく薄明のこゝろ優かに通ひて、不斷に相續す。悟後にも尙迷ひあり、悲しみあり。さはれ、感謝す、神の我等に送りたまふ平安は、此の世の與ふるが如きものにはあらざりけり、如何なる罪障深重の雲霧も、尙ほ之れを蔽ひつくすこと能はざるが故に。されば法悅の人は、半夜ま[illegible]ば〳〵懊惱の夢覺めて、「攝取の心光」常にわれらを照護したまふ荷恩の一念、そゞろに禁めあへざるとあるなり。あはれ、慕はしきは神より來たる法の悅びなるかな。法悅なき人生と世界とは、あはれ如何ばかり果敢なく、寂びしく、趣味なく光明なき荒墟なるべき。法悅こそ、我等に自己充足の唯一の眞幸福を與ふるものなれ。世に誰れか眞幸福を慕ひ求めざる、而して誰れか眞幸福を慕ひ求めて法悅の人たらざりける。古の覺者は、戀人を戀ふるが如くに法悅を戀ひ求めき、而してそこに永しへに朽ちず凋まざる眞幸福の花を摘み得たりき。かの佛家が法喜といひ、禪悅といひ、歡喜地といひ、儒家が名教の樂地といひ、基督教家が光榮といひ、莊周が天樂といひ、スピノーザが欣悅(Beatitudo)といひ、カーライルが祝福(Blessedness)といひ、乃至は古希臘のストア派の哲人が知見に伴ふ幽微なる怡悅の感といへるが如きもの、いづれか皆謂ふ所の法悅と同じ心證の味ひを道破したるものにあらざり

し。古の哲人君子は、法悅を求めて法悅を得たり。彼等は皆法悅優游の人也。

快樂は束の間に逝きぬべし、法悅は常恆にして不易也。快樂は人心感性の一邊と相渉るのみ、法悅は全人全靈を潤し煦む。快樂は動もすれば退嬰墮落の緣を與へ易し、法悅は常に向上自彊の源となる。かるが故に法悅の人は、世の所謂耽樂者（ドニスト）、享樂家（ジーカア）、快樂狂とは迥然として其の品彙を殊にせり。あらず、世俗の榮華や快樂に、一念の安きを褫はれざるものをこそ、眞個法悅の人とはいふべけれ。法悅の人は外慕の人にあらず。彼等は古人がいみじくも評し得たるが如く、刑臺の上に立つて、尙ほ克く一念相續の樂しみを渝へざるもの、而して是くの如きは實に世の快樂狂の見て以て不可思議とする崇高なる矛盾（パラドックス）相なり。法悅の人は、世俗の苦樂によりて其の操る所を失はず。彼等は能く一切の快樂を遺て去ることを得べし、而かも竟に法悅を遺て去ること能はず、法悅卽ち彼等が唯一の眞生命、眞幸福なれば也。

若し一切の感情は、他の一層高大なる感情に因りてのみ調御することを得べしといふを眞理なりとせば、法悅の人こそ煩惱調伏の勇者なれ。法悅の人、亦時に煩惱迷惑なきこと能はず、而かも彼れは能く其の高き感情に因りて之れを調御し、若しくは醇化善導して其の處を得しむる也。法悅は人をして一切の劣情を脫離せしむ。天地永恆の眞理の活源頭に掬み來たれる一味不盡の法悅は、吾人をして克伐、猜忌、怨恨、不平などいふ一切狹陋なる心事を超脫して、以

て他と共に俱に道に進む大公至正の情を厚うし來たらしむ。

されば又法悅の人は寂寞の人にあらず。彼れに空虛なし。人或は法悅の人を以て枯木寒巖底の人と思ひ做すべし。されどこれ「法喜を以て妻となす」と言ひけん古へ人の游泳無限の心を得味はざるものなり。彼れは戀なきを悲まず、神は卽ちその戀なれば也。彼れは友なきを憂へず、萬有は卽ちその友なれば也。既に法喜の妻あり、法喜の戀あり、法喜の友あり、隨處いかでか感應の春ならざるべき。誰れかいふ、法悅の人卽ち枯禪の人と。

法悅は活動也、勢力也、充實也。法悅の人は「神に醉へる人」也。而して神に醉ふの人は又神に覺むるの人也。眞に深く神に醉ふ法悅の人にして、始めて能く眞に神に覺むる活動の人たるを得べき也。神に醉ふは平等の一面にして、神に覺むるは差別の一面也、前者に寂靜、解脫、安心の消息を見るべく、後者に活動、發展、實現の消息を見るべし。一は神と偕に樂しむの境涯にして、他は神と偕に働くの境涯也。

(佛敎は前者に特長を有し、基督敎は後者に特長を有す、この二特長を合はせ攝めたるもの、卽ち理想的宗敎の形なるべし。釋迦、基督は多少の長短はありながら、いづれもこの二面をその一人格、一意識に合はせ得たる也。) 法悅の人には、日常平凡の事も、妙に皆一種光輝ある意義と價値とを著け來たりて何とはなく我が生の空しからず、嬉れしく、ありがたく、働き榮のする心地已みがたし。彼れは一面脫然とし

て、超道德、超義務の境に歩みながら(神と偕に樂しむ者に何の道德かあらんや、何の義務かあらんや、彼れに取りては神意卽一切也)他面には又日常道德の境に親切なる功夫の脚を著くることを忘れざる也(神と偕に働くものは、又おのづから日常道德の則を歩まざるを得ざる也、彼れは道德を道德の爲めに守らず、神の意志、神の人格の要求なるが故に之れを守る)。彼れは死を思はずして生を思ふ。彼れは一面に於いて化他報恩の念抑へんと欲して抑ふる能はざる積極的菩薩行の人也。何を以てか然る、他なし、彼れは卽ち天地永恆の實在と連なる神子の自覺に、自家の本性を完うせるの人なれば也。自ら充ちて人を充たしむ。法悅の人は自(みづか)ら動き進んで愛神愛人の人たらざるを得ざる也。法悅の中に社會的發展の動機あり、內容あり、スピノーザをして言はしむれば、法悅(Beatitudo)卽て剛壯(Fortitudo)也。法悅の人にありては自他心力の剛壯てふことを離れて復た眞幸福はあらざる也。法悅やがて力也、德也、愛也、完成也。法悅そのものを外にして、また德の報償はあらざる也。

今の世には所謂活動の人、事功の士、必ずしも乏しからず、たゞ神に醉ふの人、法悅の人に至りては、寥々として見ること稀也。われ法悅の人を懷うて、神情孤り遠行す。嗚呼今の世に眞個法悅の士なき、やがて眞個大活動の人なき所以なる乎。法悅の論を作る。

（明治三十九年四月）

# 信仰詩につきて

△近來の詩壇に神、永生、不朽、解脫、救、自覺などいふやうなる哲理觀、宗教問題に新聲を賦せんとするもの漸く出でんとする兆あるは喜ぶべし。兎に角、わが新詩壇が歩々眞面目なる自覺に向つて進みつゝあるは事實也。

△今更説くまでもなく、世に宗教的意識、信仰上の現象ほど、詩趣の含蓄に饒めるはなし。神といひ如來といふ根本の觀念そのものが、既に詩也、而してこの根本の詩的觀念を詮表するの形式が、亦或詩的、美術的記號を籍るの外なしとせば、宗教の一面は、始より終りまで詩そのものと聯なれりともいふべし。詩人一たびこの境に脚を著けんか、亦想源の涸るゝを憂ふるの遑なかるべし。

△かゝる宗教詩、信仰詩の不朽を盛飾するもの、宗教界の中より出づべきか、はた詩壇の側より出づべきか、いづれはあれ、今後瞪目して待つべき詩界の新福音の一つは是れなるべし。但だ談は寔に容易ならず。

△今日の宗教界、中にも基督教、中にも組合派などにありては、宗教の社會的、經綸的、功利的、教會的方面は中〻盛んに發揮せられ居るやうなれど、神在ます我らが心の奥なる不斷の搖らぎに、久遠神祕の盡きせぬ詩趣風神を掬まんとする者は、いと〳〵尠なし。今の教會的宗教家にして、證道といひ解脫といひ自覺といふ深きインワードネスの眞趣味、眞風光に參じ得たる者幾人ありや。予輩は彼等が常に個人

的、隱遁的として排斥する古の山林泉石の高士、方外の世捨人の、苟且に物したる筆の跡にも、往々此の世のものとしも思はれぬ縹渺限りなき高情遠神の宗教的詩趣を發見する也。所詮、今の宗教家の多くは、宗教の詩趣を得味はず、偶〻之れを味ふ者あるも之れを歌ふの言葉を有たず、而してこの言葉を有てる世の新詩人、又多くは宗教の詩趣を解するの人たらず。宗教詩、信仰詩の容易に得難き理こゝに存す。

△詞華徒らに繁くして、人を動かす眞情の乏しきは詩壇の最も忌む所、眞面目なる人生詩を殊に然りとす。神、佛、解脫、永生、歸依等のいかめしき文字のみ徒らに眼を射て、一篇の神情邈然、空洞の音をなすもの、最も唾棄すべし。

△歌ふ前にまづ味はざるべからず。一穗の粟、老農之れを說けば能く人を動かす、他なしその言葉が直ちに趣味の實驗游泳より出づれば也、まして人生問題、信仰問題を歌はんとする者は、之れに副ふ宗教的素養の深きものなかるべからず。宗教家たると詩人たるとを問はず、宗教的趣味に游泳せるものにして、始めて情調高く、含蓄深き信仰詩を物し得べし。テニソンの『イムメモリヤム』やウォーヅウォースの『インモータリテー』の作が、永しへに人を動かすの力あるは、其の深奥なる實驗の味ひの自づから流露したれば也、その一々の文字が、文字以上の趣味の光輪を放射しつゝあるを見よ。信仰詩豈容易ならんや、之れに筆を染めんとする詩人は、先づ自ら信仰の趣味をわが有とせざるべからず。更に語を切にして言へば、彼れ先づ自ら信仰の人たらざる

べからず、覺醒證悟の人たらざるべからず。

△今の世に若し解脫文學を唱ふるものありとせば、又須く思ひをこゝに致すべき也。自ら解脫の眞風光を味はずして、解脫に緣ある文字を連ねたりとて、何の詮かあらんや。

△泣菫子の作に信仰詩の情調の高き一ふしあるは、何人も認むる所なるべし。予輩は子が『二十五絃』の或作に所謂歸依のにぎ魂の、悠々たる信樂の聲、法悅のさらべを聽きて、自づから心躍るを禁めあへざりき。新詩壇の一異彩と見るべし。鐵幹子の新作、又一二此の方面に觸るゝものあらんとし、泡鳴子の作中また此の境に踏み入れるもの尠からず。尙ほ他にもあるべし。予輩はこの幽玄なる未踏の新境地に詩才の出現を望むと切也。

（明治三十九年四月）



# 神祕と宗教

南無妙法蓮華經及び南無阿彌陀佛の信仰に對する眞摯なる理解と同情となくては、何人も日蓮及び親鸞の人格、事業の一斑をだに說き能ふまじ。世に說をなすものあり、以爲へらく、釋迦基督の偉なる所以は全く其の慈悲心にあり、獻身的精神にあり、之れを外にして彼等の宗敎的信仰てふものは、畢竟迷信の塊のみ、復た多く言ふに足らざる也と。如是の言は、つまり宗敎を倫理的、實際的に解したるものにして、穩健はあらんが、さりとて何等の宗敎的直觀もなき淺人語と評すべし。彼等が釋迦基督の人格と事業との偉大をその獻身的精神の權化たるの一點に歸するは、洵に允當

の見ならんが、但だ釋迦基督をして、かゝる偉大なる獻身的精神に動かしめたる神祕的信仰の活源頭につきては、彼等多くは、邈焉として語る所あらざる也。

世の宗教家にして尙ほ且つ此れに類したる見解と態度とを持するもの多きに至りては寧ろ大怪事といふの外なし。彼等も亦自己が祖師の人格事業を稱美するに忙しくて、而かも其の人格事業の依つて迸り出でたる神祕的信仰の中心には、多く立ち入りて言ふを好まず、なるべくはそつと蓋をするか、傳說のまゝにあつさりと聽き流しおくか、陽に信じて陰に疑ふか、或はさる事もありけるにかと漠然たる推しはかりの見を下して安んずるか、いづれはあれ、大方はかゝる生ぬるき半呑半吐の見解態度に搖られ居るなり。

眞摯に、正直に、大膽に、論理的に、この點に關する自家の見解、態度、信念を抱持し主張するもの、今の世に果たして幾人かあるべき。

知らずや、我等が見て以て如何に茫漠、曖昧、奇怪、迷信なりとせる神祕的信仰も、彼等祖師先覺其の人に取りては、やがて其の浩々として山を移し世を動かせる大動力、大事業の活源頭たりし事を。神祕を見ずして彼等を道說するは、是れ最も大切にして眞面目なる彼等の半面を逸し去りたるもの、あらず、これ畢竟神魂（ソール）なき彼等が皮一重を刻めるもの、宗教的常識なき嗚呼の沙汰と評すべし。

ましてや彼等が神祕觀の中心は、決して奇怪にもあらず、曖昧にもあらず、迷信にもあらず、是れ實に彼等が其の自ら

欺く能はざる深奥なる靈魂の全要求を提げて、直ちに實在の根柢より攫み來たれる意識直證の事實なるをや、釋迦が畢波羅樹下に大覺せし涅槃甘露の一味の神祕は迷信なる乎。基督が入る息出る息の游泳自在を證せし神子てふ自覺の神祕は奇怪なる乎。然らず、是れ苟くも眞摯に信仰上の實驗を握れるものが、其の全人應和の聲を擧げて、實に然り、アーメンと唱へざるを得ざる不壞金剛の眞理にてあるなり。所詮萬古に蔚然たる彼等の人格事業が、是くの如き一個の神祕的信仰を中軸とし、核心として、結晶し發展し來たれること、抹すべからざる事實なり。水を觀るものは淵を見るを要し、釋迦基督を見るものは其の神祕的信仰を、見るを要す。さらば如何。吾等をして傳說に依らず、敎權を頼まず、經典を媒とせず、先覺の註疏、闡明を藉らず、更に進んでは時に釋迦、基督の人格、自覺をさへ、尙ほ一閉の障礙と排し去つて、顏々直ちに衷なる神光に接するの大神祕に參し來たらしめよ。是くの如き一段の深切なる自觀の用意と功夫とありて、始めて彼等が人格と事業との祕鑰に觸るゝを得べき也。而して是れ實に宗敎的向上の心を有するものの、皆等しく到るべき、又到らんと願うて已まざる所のものにあらずや。

世のトルストイ主義を奉ずるもの、亦多くはトルストイの人格事業を說くに忙はしくして、その人格事業の祕訣の源に說き入ると稀れなるに似たり。されどトルストイの純利他主義や、無抵抗敎や、勞働觀や、非戰論や、一種の復初的

社會觀や、皆是れ詮じ來たりて、其の慘憺たる見神の一實驗に含まれたる神祕的自覺を中心として、回轉し、發展しつゝあることを忘るべからず。此れを遺てて惟り彼れを說く、嗚呼彼等も亦宗敎の神祕にそつと蓋をせんとする當世一流の利口者なる乎。

深奥なる神祕的自覺の根柢なくして、偉大なる宗敎的信念及び運動はあらず。神祕は迷信にあらず。達者は一塵裡に天を見るとぞいふ。感覺といひ知識といふも、之れを推し之れを窮むれば、竟に又神祕力の發現といふの外はあらざるべし。神祕は迷信にあらず。古より世〻の宗敎が、淺薄なる死形式に固まりたる時、いつも之れに一掬の新生命を澍ぐものは個人直識の自證を叫び出てたる一派の神祕觀の賜ならぬはあらじ。神祕觀は世〻の宗敎の生命の親也。わが今日の宗敎界、亦復たこの生命の親たる神祕觀に對する要求の最も痛切なるものあるにあらざる乎。

謂ふ所敎會的宗敎、世俗的宗敎、社會的宗敎、事功的宗敎、行政的宗敎は、今や到る處にその聲を大にしつゝありて、一面頼もしき感もあれど、さりとて敎界先覺の士の一個半個の、能く神祕の太源に深潛して、そこに一代の宗敎的生命を攫み來たらんとするものなきは、甚だ心細き至りと謂はざるを得ず。そも〳〵實際的、功利的氣質を以て勝れるわが國民性は、彼等をして又復た宗敎の神祕にそつと蓋をするの細心家たらしめずんば已まざる乎。

宗敎と神祕との關係を想うて特に今日の宗敎界に感な

さを得ざる也。

# 信仰問題に關する復書

## 一

過般は御懇情の書を辱うし、早速御返事をと存じながら、例の疎懶生活の、心ならぬ御無音、御寛恕下されたく候。

毎度ながら小著に對して過分なる御褒辭、赧顏の至りに存候。但だ、御言葉のはしゝに溢るゝ御同情の匂ひは、身にしめて嬉れしく、殊に小著が、貴下半生の御實驗と何等か相響き候ふしの候由にて、縷々御眞情の御披瀝に接し候事、洵に淺からぬ結緣とや申し候べき。光榮の至りに存候。

貴下が所謂「自覺自證」に入り給へるまで、迷悟幾番か、亂れぐるしき心の緒を辿りたまへる活ける心證史を讀まんも

の、誰れかは肅然として深省を發せざるべき。貴下が、貴下みづからの實驗の一部を、小生の淺き實驗に讀み出でたまへる如く、小生も亦、小生みづからの實驗の一面を、貴下の實驗に讀み出て候心地して、所謂「戰ひを復び戰へるの」感、禁じがたく候也。

批評がましき事など、勿論申上ぐる分ならず。否、個人的なるが本來の信念界に、嚴密にいふ批評の可能といふと、そもそもの疑ひに候べく、縱令こゝにも窮極至上の客觀的判斷の標準てふもの、有之といたすも、其のやうのものを揮り翳して、當面に自他を批判せんと、容易に候はず。小生をして自己の信念を敬すると共に、貴下の信念をも敬せしめよ。されば今批評と言はず、唯だ小生の信仰眼より讀み出でたる貴下の信念につきて、且らく言ふ所あらしめんか。

## 二

貴下が、信仰の內容は不斷に發展向上すべきものにして、靜止的、恆常的のものにあらずと宣へる、甚だ意を得たり。信仰そのものは絕對的のものなれども、信仰の內容卽ちその知的方面には不斷の變動發達これあるべし。佛家が「悟後の修行」を言ひ、「證上の修」を唱ふるの意に徵し候ても、信仰の一定不動のものならぬは分明なるべく候。但だし、小生は同時に又、かの豁然大悟といひ、三昧發得といひ、心華開發といふが如き獲信の一心狀態をば、其れが似而非なるものならぬ限り、其の一時的、瞬閒的なるの趣きあるの故をもて貴下の如く輕視し去るを得ず候。かゝる一種の開悟、も

しは光耀の狀態に入らずんば、何人も信仰の人たるを得ずとは申さじ、機根の差あり、功夫の別あり、外緣事情等の相違ありて、一律に申しがたきふしの候へば也。さりながら、今若しこゝに此かる眞個光耀の實驗を有し候ものの候はんか、かゝる人に取り候ては、其れがたとひ一瞬閃的狀態なりしにもせよ、其の信仰生活上、不拔の一契點、一樞機をなすものとして、重大の意義及び價値を有すること、否まれまじき事實に候べくや。この一實驗こそ、當の人の宗教生活史上に際やかなる一線を劃し、かくて彼れをして、我れ始めて信を獲たりてふ所有の自覺に觸れしむるものに候へば也。是れ豈輕々に看過すべきものに候はんや。

尙ほこの點に關する小生實驗の一端を申し述べんか。

開悟もしは光耀の消息は、かくの如く吾人の宗教生活史上に一轉機を劃し候もの故、この事ありし前と後と、卽ち悟前と悟後、若しは信前と信後との吾人の心生活に、おのづから著るき轉變あるべきは理の當然かと存候。悟前を夜の領といたさば、悟後を晝の領といたすべく、而して開悟の一境は、おのづから是れ疑ひの薄明を破り出てたる山河歷々、千里晶明の曙光とも申すべく候はんか。悟前の夜の國にも、時に闇を破るの月光あり、星輝あり、されどそは悲哀の中の歡喜也。悟後の晝の國にも、屢〻遮日の浮雲あり、されどそは歡喜の中の悲哀也、悟前の心は搖ぎ〳〵て姑くも休む時なく、悟後の心は動くが中にも湛然不動の落ちつきあり。畢竟、貴言の如く獲信の內容には、不斷の向上あり變動ある

べきも、悟前と悟後と、若しは信前と信後と、吾人の心的態度に、かゝる分明なる境界線あるを實驗上の事實といたし候上は、向上といひ變動と申すも、悟後信後に於いては、所詮大いなる安心不動の地盤上に於ける小淘ぎの沙汰とこそ存候へ。　かるが故に、悟後信後に於いて、吾人の動くや、單だ動くにあらず、神と偕に樂しみつゝ動く也、戰ふや、單だ戰ふにあらず、不動の信念に立つて戰ふ也。

## 三

貴下が信仰を說きて、信仰とは吾人の生くる所以の道、人生生存に意義あらしむるものと言ひたまへるは、簡明切實、一毫の異議も候はず。　トルストイの如きも、「信仰は生活の力也」と喝破し、信仰を離れて人生生存の無意義、不可能を極力辯じ居り、この一事、實に千古の確論と存候。　如何にも信仰は生活の力に候、但だこの力の一字に神秘の二字を加へて更に其の意義を精核ならしめよ。　信仰とは畢竟神秘力の謂ひには候はずや。　自己と或超自然的實在者との一種の神秘的關係を外にして、謂ふ所の信仰は候はず。　如是深根柢より涌き出づる神秘力を外にいたして、いづくにか復た吾人全人を鼓舞、顚倒、奮勵、向上せしむる生活の偉力か候べき。　世のトルストイを言ふ者は、先づ彼れの信仰を見ざるべからず、彼れが信仰を言ふ者は、先づ彼れが見神の實驗及び之れに伴ふ一種の神秘的自覺の偉力の源に探り入らざるべからず。　彼れが事業と人格とは、この神秘の一源より不斷に噴騰し來たりつゝありと知らずや。　彼れにあり